

## 「綴方岐阜人」に集った同人たち

### 昭和十年代前半の岐阜県の綴方教育

高橋 弘

#### 一 はじめに

昭和十一年四月、「綴方岐阜人聯盟」という同人組織が誕生した。綴方岐阜人聯盟（以下「岐阜人連盟」と表記する）は組織として幾つかの活動を行っているが、先ずその年の九月には、「岐阜人連盟」の会誌「綴方岐阜人」（以下「岐阜人」と表記する）を創刊した。菊版、活版印刷の創刊号（33ページ）に、同人として名を連ねたのは、三十名であった。野村芳兵衛（千葉・日出学園）を除き、あとはほとんど全部が、その時点で岐阜県内各地の小学校に勤務する綴方愛好の教師たちであった。

「岐阜人」は、翌昭和十二年五月に第二号（47ページ）、誌名を「教育岐阜人」と改めた第三号（47ページ）が昭和十三年九月に発刊されたが、それ以後の発行はなかったようである。同人数は、第二

号の頃三十五名、第三号の頃三十八名と、それほど増加は見られない。編集兼発行人は、三号を通して武儀・美濃小の水野義文となっている。

この「岐阜人連盟」が発足した昭和十一年から、「岐阜人」の第三号が発刊された十三年の頃までの、日本の状況がどのようなであったかを見ると、例えば、昭和十一年二月の二・二六事件、十一月の日独防共協定締結、翌十二年七月の日中戦争の勃発と日本軍による中国全土への侵略開始など、戦争の渦の中へ人々を巻き込み、破滅への道をひた走りに走る状況が、政治、経済、社会、教育、文化等の面に色濃く現れ始めた時期であった。そして、国家権力による戦争体制強化は、この後、年を追って一層激しく、厳しいものとなって行くのである。

教育においても、国策遂行・貫徹のための教育思想、教育内容等

にかかわる変容は急激な転換を学校・子ども・教師・父母・関係者に迫った。ちょうど「岐阜人連盟」発足の昭和十一年、「岐阜縣教育」五月号に載った「昭和十一年度岐阜縣教育會總會記」の記事の一部からも、その雰囲気を感じ取ることができる。

#### 縣諮問案

一、時局ニ鑑ミ教育刷新上特ニ留意スベキ事項如何

#### 答申案

時局ニ鑑ミ教育刷新上特ニ留意スベキ事項一ニシテ足ラズト雖モ其ノ根本ハ國民ヲシテ萬世一系ノ皇統ヲ中心トシテ我等ノ祖先ガ世々忠孝ノ道ニ勵ミタル國體ノ精華ヲ體認セシメ以テ日本教育ノ樹立ニ努ムルニアリ。而シテ之レガ達成上左記事項ノ實現ハ刻下ノ緊要事ト認ム。

とした上で、「教育者ハ徒ラニ理論ノ末ニ趨ルコトナク常ニ行ニ據ル人格ノ修養ニ努ムルコト」、「教育者ハ時局ニ對スル認識ヲ深メ教育報國ノ精神ヲ振作シ協力一致以テ目的ノ貫徹ニ邁進スルコト」など十二項目を挙げている。

国定教科書がなく、教師裁量の自由さを比較的留めていた綴方教育も、川口半平が戦後「昭和十一年ごろから感じられるようになった当局の弾圧に、綴方はむしろ沈潜期に入っていたと言ってもよかった。『生活綴方』の人々も、ようやく鳴りを静めて低い姿勢へ移り、

……」(『作文教育変遷史』)と述べたような状況に移行しつつあった。

このような多難な時期に、岐阜県で、僅か三年間余りではあったが「岐阜人連盟」の活動が続ぎ、「岐阜人」も三号とは言え、発行されたのである。

この昭和十年代初めの頃までに、岐阜県教育会が出していた月刊誌「岐阜県教育」は別にして、岐阜県において、小学校教員が自己の教育実践や成果、思索などをまとめて執筆し、編集・印刷し、継続的に発刊して来たものとしては、「研究」、「北斗」の二誌がある。

前者は、大正十二年四月に創刊された研究誌で、岐阜県師範学校附属小学校訓導が、各教科における実践研究の成果についてのまとめを載せた、研究紀要といった内容のものである。後者は、昭和四年七月に創刊された同人誌で、岐阜県女子師範学校附属小学校訓導が会員となる北斗会の編集、発行になるものである。同人誌ということもあって、内容は論説、研究、随筆、創作、コラム等、前者より幅広く自由な雰囲気があったよっている。

「研究」「北斗」それぞれ、内容的に違った持ち味を出しているが、どちらにも共通することとして、師範学校附属小学校という、当時の県下小学校教育の実践的指導校に勤務する教師たちだけの執

筆になるもの、という限定があったことである。

しかし、「岐阜人連盟」の場合は、特定の学校という限定ではなく、県下各地の、綴方指導に強い関心、意欲を持ち、その実践に取り組んでいる小学校教員が、自分たちの手で同人組織をつくり、その組織的活動の成果を、「綴方岐阜人」という同人誌にまとめていったものである。こうした組織のつくり方、こうした同人誌の発刊は、それまでの岐阜県においては見られなかった性格のものである。

本稿は、「岐阜人連盟」の同人となった教師たちが、組織活動を展開する中で何を願ったのか、「岐阜人」刊行を巡っての活動は、同人たちの日々の教育実践や綴方指導等にどのように結び付き、発展していったのかなどについて、検討を加え、考察を試みようとするものである。

## 二 発足当初の「岐阜人連盟」活動状況

「岐阜人」創刊号巻末には、各種の取り決め、連絡・案内事項が掲載されている。その中の「綴方岐阜人連盟の足あと」に記された内容等により、昭和十一年四月発足した岐阜人連盟の、年末までの活動状況を見てみると、次のようである。

1. 昭和十一年四月十一日 岐阜柳ヶ瀬、明治キャンデースト

ア階上に於て發會式を擧げる。集る者

岸武雄、丹羽康平、安池重壽、河合芳男、尾畑鐘政、大野繁一、田中盛兒、鈴木五十雄、今井鑑三、清水要、後藤慶一郎、鷺見臣一郎、水野義文、それに川口半平、横山晋の御大。

酒は勿論なかつた。然し會名・會規・青年教師の生き方、其他について元氣に喋り合つた。

2. 昭和十一年四月十五日 「岐阜人小片」第一號發行。

3. 昭和十一年六月二十一日 午前九時より、岐阜市明德小學校講堂にて野村芳兵衛氏の綴方講演會開催、聴講者約三百五十名。斯界の先輩西尾彦朗、川口半平、横山晋の三氏が出席、午後住吉屋にて座談會を開く。集る者三十數名、生活教育について熱心に話合ふ。同人出席者

(筆者注・発会式の参加者として名前が挙げられていた者を除く) 高井丈一、遠

藤敏夫、山田俊、伊藤健吉、小林英一、小栗則之、田中文夫

4. 昭和十一年七月二日 「岐阜人小片」第二號發行。

5. 昭和十一年九月二十日 「綴方岐阜人」創刊号発刊

6. 昭和十一年十二月二十日 第一回岐阜人研究発表座談會。

岐阜市明德小学校において。同人出席者は今井鑑三ほか十九名、その他来聴者多数。発表者は、安池重壽、河合芳男、今井鑑三、水野義文、丹羽康平、岸武雄、鷺見臣一郎の七名。

このような、四月の発会式から八か月間の具体的な活動状況を見ると、岐阜人連盟に集まった同人たちの、何かをやらずにはおれないような気分の高揚、熱気、行動力を感じさせるものがある。「岐阜人」創刊号には、こうした活動の基盤となる連盟の規約等が載せられている。

#### 綴方岐阜人聯盟規約

- 一、本會ハ綴方岐阜人聯盟ト稱ス
- 一、本會ハコノ組織ヲ通ジテ會員相互ノ文化ヲ交通シ友情ヲ高メ綴方ヲ中心トスル教育一般ノ前進ヲ意圖スルヲ以テ目的トスル
- 一、本會ハ同人及會員ヲ以テ組織ス
- 一、本會ノ事業ハ大凡左ノ通り定ム
1. 會誌發行（別項細則ノ通り）
2. 講習會、講演會開催
3. 研究發表會、座談會、作品合評會開催
- 一、本會ノ諸費用ハ左ノ方法ニヨリ支出ス
1. 會員ハ會費トシテ年額五拾錢ヲ據出スルモノトス
2. 同人ハ同人費トシテ年額參円ヲ據出スルモノトス
3. 本會ノ費用不足ヲ告グル場合、同人ハ不足分負擔ノ責ヲ負フモノトス

一、本會ハ縣下便宜ノ場所ニ事務所ヲ置ク

一、本會ハ左ノ委員ヲ設ク

1. 雜誌編輯委員 四名

2. 講習會、研究發表會委員

一、本會ハ必要アル場合地方ニ支部ヲ置ク

この規約の目的の条に述べられていることから分かるように、綴方岐阜人聯盟に集まった同人たちは、最初から綴方教育、綴方指導だけを問題にしようとしたのではない。綴方を中心にはするが、教育全般にわたって、学校内、同一地区内という狭く限られた範囲を越えて、岐阜県下各学校、各地区の教師たちの論じ合い高まり合う組織をつくりたいということでの会の歩み出しを図った、ということである。

### 三 「綴方岐阜人」の同人

#### （一）同人と会員

前掲の「綴方岐阜人聯盟規約」をみると、「本會ハ同人及會員ヲ以テ組織ス」とあり、会の費用の拠出についても、同人と会員では年額等に相当な開きがある。会誌「岐阜人」への原稿応募は、同人に限定するやり方がとられている。同人と会員とはどのような違い

があったのだろうか。

「岐阜人」創刊号の裏表紙の広告欄には、「會員募集」として、「縣下教壇に立つ新人は來り會せよ！ この郷、この土に根ざす教育の健實なる前進の爲に！」の呼びかけがあり、また、同人向けの通信「岐阜人小片」(NO・4)には、「會員ヲ倍加シタイ其内ヨリ秀デタモノヲ同人トスル」、「岐阜人研究発表会の案内の中に」會員及其の候補者を多數つれて來ること」という文言がある。

その他の「岐阜人小片」を読むと、折々に「……………恵那郡長島校の古屋武兄、恵那郡加子母校の板津專造兄、これが是非同人にはいる様に御勧誘下さい。」(伊藤健吉)「……………專攻科の山田公平君が一人、入れてくれないかとのことだ。」(岸 武雄)など同人の推薦報告が見られ、これらをまとめて、「小片」(第二卷第四号)には「新入同人披露」の項目で、水野義文が次のように報告している。

1. 綴方の本はみんな読んだと言ふ山田公平君(專攻科)
2. 構成教育で名をあげ女師附属から去つた金井澤威君(益田・下呂校)

3. 今年、女師附属へ來た柘植工君と田中忠夫君

4. 郡上に『奥美濃国語人』を組織してガンバツて居る讀方の片桐哲郎君・綴方の渡辺修二君・渡辺初一君の三人、いづれも(郡上・八幡校)

5. 横山晋先生について生活教育にすばらしい成績をあげてゐる田中宗平君(可児・御嵩校)

これら、いづれも縣下つぶよりの訓導であらう。他に數名申込みあり。目下考慮中

これらの中の、特に「(會員の)内ヨリ秀デタモノヲ同人トスル」他に數名申し込みあり、目下考慮中」というような言葉からは、「岐阜人聯盟は、申し込めばすぐ、だれでも同人會員になれるのではない。先ずは會員となり、現在の同人たちが、その人物、実績、今後への期待等も含めて推薦してくれた時に初めて同人となることができる」という質的な面での厳しさが感じられる。

もちろん、年三回の「岐阜人」発刊、その他の事業を予定している岐阜人聯盟としては、経済的基盤をより確かにするための同人数の増加を図ることは、事業を行う上からは避けて通れない問題である。が、それよりも、『岐阜人』の同人は、どの一人をとってみても、県下のどの学校においても、日々の現場実践といい、教育の考え方といい、将来有為の人材である」と認められる存在になつてもらうような願いをもって、組織化がすすめられたことが分かる。

#### (二) 岐阜師範学校卒業者

同人名は、「岐阜人」創刊号から第三号まで毎号掲載されている。

創刊号に三十名、第二号三十五名、第三号には三十八名。三年間に二、三の退会者はあったが、同人のほとんどが創刊号からの継続者である。

同人は岐阜師範学校の卒業者がほとんど全部である。では、岐阜

人連盟の同人として、当時どれくらいの年齢の教師たちが集まったのであろうか。これを推測する手がかりとして、師範学校卒業年次に表示したのが次の《表1》である。

氏名に◆印を付したのは、創刊号からの同人である。

《表1》

「綴方岐阜人」同人 岐阜師範学校卒業年度一覧

年度	氏 名 (◆は創刊号の同人)
大正 6	◆横山 晋
7	◆川口半平 ◆野村芳兵衛
8	
9	
10	
11	
12	◆福田 実
13	
14	
15	◆鷺見臣一郎 ◆丹羽康平 ◆座馬直樹 ◆水野義文 ◆大野繁一 ◆嶺 光雄 ◆高井丈一
昭和 2	曾我勝二 ◆安池重寿 山内孫四郎 ◆田中盛児 田中宗平
3	◆今井鑑三 ◆清水 要 ◆鈴木五十雄 ◆山田 俊 ◆近藤宗雄 (専攻科)
4	◆小木曾薫 ◆小栗則之
5	長尾忠一 ◆後藤慶一郎 戸谷重太郎 柘植 工
6	伊佐治光雄 ◆遠藤敏夫 ◆伊藤健吉 ◆尾畑鐘政 片桐哲郎 ◆渡部高雄
7	◆岸 武雄 ◆田中文夫 三浦一雄
8	◆河合芳男 田中忠夫 ◆小林英一
9	藤田正三
10	山田公平
11	田原四郎

◆花村 奨 卒業年次不明

当時の師範学校制度から考えると、師範学校を卒業して小学校訓導となるのは、二十歳である。「岐阜人」が創刊された昭和十一年九月時点での同人で見ると、卒業年次の一番遅い(昭和八年三月卒)の河合芳男、小林英一は二十三歳くらいと推測される。編

集兼発行人の水野義文は大正十五年卒業。そこから逆算してけば二十九歳くらいということである。

このようにして表を見ると、昭和十一年「岐阜人」創刊の時の同人の九十パーセント近くを占めるのが、水野義文、鷺見臣一郎らを

《表2》

## 「綴方岐阜人」同人の勤務校

郡市	人数	校数	校 名 ( ) 内は人数
県外	1	1	千葉・日出校 (1)
岐阜	11	6	白山校 (1) 長良校 (5) 明德校 (2) 本荘校 (1) 島校 (1) 長良実女 (1)
稲葉	4	2	常盤校 (1) 加納校 (3)
羽島	1	1	笠松校 (1)
本巣	1	1	真桑校 (1)
山県	1	1	高富校 (1)
揖斐	1	1	小島校 (1)
武儀	7	4	美濃校 (4) 上牧校 (1) 菅田校 (1) 上麻生校 (1)
郡上	4	2	八幡校 (3) 白鳥校 (1)
加茂	2	2	坂祝校 (1) 古井校 (1)
可児	2	1	御嵩校 (2)
土岐	4	4	瑞浪校 (1) 稲津校 (1) 下石校 (1) 市之倉校 (1)
益田	3	2	萩原校 (2) 下呂校 (1)

最上級生とする二十歳代の青年教師たちであったということになる。「岐阜人」、「岐阜人小片」発行を初めとする「岐阜人連盟」の気力溢れる活動は、二十歳代の青年教師集団の醸し出す若さのエネルギーによるものであったことが分かる。

ではこの時期、岐阜人連盟に集った若い同人たちが、岐阜県下のどの地域、学校で教育に取り組んでいたのかを示したのが次の《表2》である。

当時、岐阜県下には十九郡市あったが、表2によると、その四分の三近くを占める十四の郡市名が上がっており、岐阜人連盟に集う同人の広がりを見ることができる。

## (三) 美濃小学校の同人たち

ここで注目されるのは、一校五名という同人数の、武儀郡・美濃小の存在である。

「岐阜人」創刊号の奥付を見ると、「綴方岐阜人」の編輯兼発行人は水野義文であり、編輯委員四名は水野に加え鷺見臣一郎、後藤慶一郎、清水要と、四人の美濃小の訓導である。また、雑誌の発行所・綴方岐阜人連盟の所在地は岐阜県武儀郡美濃町となっている。つまり、「岐阜人」の編集・発行の仕事も含め、岐阜人連盟の事務局が美濃小学校内に置かれていたということになる。

岐阜人連盟としての事業の推進、全般的な運営等の面から、前掲表1を見ると、大正十五年卒に水野、鷺見の二名が居り、昭和三年卒に清水、山田が居るということで、同人中の年輩者が同一校に揃っているという好条件にあったことが分かる。そして、単に同人数とか年輩者とかの条件の外に、活動の拠点となる事務局を美濃小に置く、ということの条件が他にも幾つかあったと考えられる。

まず、水野義文の存在が考えられる。

昭和五年八月、岐阜市で開催された新興綴方講習会事件で、岐阜県においては危険視され、それから遠ざかるうとする風潮が感じられるようになった雑誌「綴方生活」に、水野は、昭和六年四月号から昭和十年五月号にかけて六回、その名前が出てくる。文集紹介欄に、岐阜県美濃小学校文集「梅山文集・第二号」(昭6・4)、同学校文集「あかめがし・第三号」(昭12・5)の紹介記事の中に、作品として短歌「虫たちのジャズ」(昭9・7)短歌的な雰囲気を持った随筆集「北海道から樺太への旅」(昭9・9)、随筆「芦屋に於ける千葉氏と野村氏」(昭9・10)、俳句「冬からまた秋へ」(10・5)である。新興綴方講習会に直接関わった川口半平が、事件後も綴方指導に関する論考、随筆、戯曲や創作などを二十四編も載せているのには及ばないが、青年教師水野義文が、生活綴方に関心を寄せていたことが窺われ、注目を集めていたことが考えられる。

美濃小の「綴方岐阜人」同人五名の中、同校への着任がいちばん早いのは水野義文、昭和三年である。次いで昭和五年九月、新興綴方講習会事件で、県当局の見せしめの途中人事で女子師範付属小(加納小)を追われた鷺見臣一郎が着任した。水野にとって鷺見は師範学校同級生。よき相談相手として力強い思いであったに違いない。昭和十年、清水要が着任。この年、学校文集「あかめがし」第一号が、編輯代表水野義文、表紙鷺見臣一郎で発刊された。そして

翌昭和十一年、後藤慶一郎、山田俊が着任している。

筆者は、「岐阜人」の編集委員であった生前の後藤慶一郎を訪ね、「岐阜人」発刊前後の頃の状況を話してもらったことがある。氏の話の概要は次のようであった。

「私は美濃小で昭和十一年から十五年まで勤めた。私が師範を卒業した昭和五年、綴方騒動があつて加納小の先生が何人か地方へ飛ばされた。横山先生は金山(校長)、福田さんは真桑、鷺見さんは美濃だった。私は前任校が武儀・菅田であつたから横山先生からいろいろ話を聞く機会を得た。鷺見さんは音楽、図工を主としてやっていた。そのうち美濃小には絵のグループができ、鷺見、水野、山田、清水、後藤はその一派と見られた。

水野さんはもともと文学青年で、よく上京した。野村先生、今井(蒼)先生とはそのころから交流があつたのではないか。

そのころの綴方指導は、いろいろな風潮の中にあつた。生活綴方、赤い鳥綴方、プロレタリア文学、調べる綴方などなど。そういう風潮の中で、『おれたちもやろう』という気が湧いてきた。明徳小の丹羽、遠藤といった人も知っていたので、『こういう人たちと組んで、組織をつくらう』という話になり、めばしい人と呼びかけた。」後藤の、この回想談からも分かるように、岐阜人聯盟という組織をつくり、会誌「岐阜人」を編集・発行していくことを発案



し、その実現へ向けて行動を起こし、維持・発展への努力の中心になったのは、美濃小学校の水野を中心とする同人五名のグループであった。

岐阜人聯盟の事務局が美濃小に置かれ、「綴方岐阜人」の編集兼発行人が美濃小の水野義文となっているのも、こうした基盤があったからと考えられる。さらにまた、美濃小が、そして水野たち同人が、「生活教育研究」ということで、東京・児童の村小学校主事であり雑誌「綴方生活」の同人でもあった野村芳兵衛と緊密なつながりを持っていたことも、岐阜人聯盟のスタートに当たって美濃小の同人たちが、県下全体にわたる事業、活動の中核となった条件の一つになっていたと考えることができる。

#### (四) 野村芳兵衛

昭和十一年五月、東京・児童の村小学校の主事野村芳兵衛編輯になる「生活学校」(第二巻・五月號)に、「綴方岐阜人聯盟の誕生」という一文が掲載された。

さきに二回にわたって愛知縣生活教育研究會の活潑な活動を報道したが、その隣の岐阜にやはり本誌讀者を中心とする研究會が生れた。「岐阜に人あり、されど組織なし」と痛感された若い諸君によつて、「相互の文化を交通し、友情を高め、綴方

を中心とする教育一般の前進を意圖する」綴方岐阜人聯盟が出来たのである。

發會式までのメンバーは、岸武雄、丹羽康平、安池重壽、河合芳男、尾畑鐘政、大野繁一、田中盛兒、鈴木五十雄、今井鑑三、水野義文、清水要、後藤慶一郎、鷺見臣一郎、嶺光雄、遠藤敏夫、高井丈一、福田實、座馬直樹等の新進氣鋭の諸君に、大御所株の川口半平、横山晋等の校長さんが恐らくは顧問格で加はつてゐる。仕事としては機関誌の「綴方岐阜人」の年三回發行、講演會開催があげてある。

第一回の講演會は六月に野村芳兵衛、川口半平、横山晋、三氏によつてなされる事といふ。

岐阜人聯盟の發會式はこの年の四月十一日である。その時に話題となった聯盟の規約など詳しい内容までが、一か月後の全国誌「生活学校」に載るということは、美濃小の水野義文たちが、前々から岐阜人聯盟の組織づくり、事業、運営等について野村芳兵衛に相談をもちかけ、野村の助言、指導を受けていたことが推測されるのである。

野村芳兵衛は、大正十三年四月、岐阜県女子師範附屬小訓導を辞し、東京池袋に創立された「児童の村小学校」に移った。その後も、野村は、岐阜県教育の動向に目を配り、そして岐阜県の教師たちと

の交流を怠らなかった。昭和十年一月創刊された児童の村生活教育研究会編の雑誌「生活學校」でも、綴方岐阜人聯盟の同人にかかわる作品を載せている。

まず、創刊号に、水野義文の「野の酒」と題する短歌七首、「花」と題する俳句四句を載せたのを初め、鷺見臣一郎「遊びの蒐集」(四月号)、水野義文「子供の氣象部」(七月号)、川口半平「村の話」(八月号)、鷺見臣一郎「子供の美術クラブ」(十一月号)、翌昭和十一年になって川口半平「小話二篇」(二巻一號)、水野義文「近詠抄」(二一三)、「子等の句」(二一五)、横山晋「教育・生活」(二一七)を掲載している。

また、前掲の「綴方岐阜人聯盟の誕生」を記事にしたのを初め、野村が筆を執る「談話室」にも、しばしば岐阜行きのこと、岐阜の人々との交流のことの報告が出てきている。それを「岐阜人」創刊に至るまでの頃で見ると、次のようになっている。

◆二月十四日(筆者・昭和十年) から三日間岐阜師範學校附属小學校の修身協議會へ出席の豫定。二月十七日は僕のもとゐた岐阜縣女子師範附属小學校を參觀。(二一二)

◆二月十六日には、岐阜師範附属の修身協議會へ呼ばれて「新修身書と修身教育の動向」に就いて話した。……………水谷視學、後藤視學、井上視學、江崎主事(男師附属)原主事(女師附属)

にはいろいろ世話になって帰った。久しぶりに師範時代の同窓は同窓會をやってくれるし、昔ゐた女子師範附属の諸君も、一晩歓迎會をやってくれるし、とても幸せな二日間であつた。

又鷺見君、水野君、丹羽君、三田村君などが中心になって、生活學校の讀者の座談會をやってくれるし……………(四月号)

◆本誌の社友中岐阜の西尾彦朗君は縣視學に川口半平君は岐阜師範の訓導から校長になつて出ました。(六月号)

◆六月八日には岐阜市明德小學校を參觀して、それに對する私の批評を聞いていたゞきました。その晚岐阜市の有志のお母様方と、家庭教育に關する座談會をしました。翌九日には、同じ明德校で「共同體社會と修身教育の實踐的革新」に就いて、午前九時から正午まで講演をしました。それから、夜汽車に乗る午後の九時までを、生活學校の讀者である丹羽康平君の家で休ませてもらひました。御嵩町の横山晋君や美濃町の鷺見君水野君が来てくれて、一しよに話したり、裏山へ散歩したりしました。(七月号)

◆水野義文君「ももきね」の今度の君の歌はとてもいいと思ふ。言葉がしつとりしてきた。そして感情が張つて来た。丹羽康平君、鷺見と二人の飛驒行き、僕も行きたくなつたよ。二階の教室まで延びたと言ふへちまや、ひょうたんの便りも嬉しかった。

(九月号)

◆百岐年・年間歌集、あかめがし 前者は岐阜の水野義文君、河村光枝君等の歌集、後者は前記の二君や大谷利一君、鷺見臣一郎君、井上榮一君、後藤敏彦君等十餘名の讀者を有する學校の文集である。水野君の短歌は嘗て本誌に紹介した新鮮なるもの、児童文も學校全體が一つの目標に向いて動いてゐるのがみられるのは愉快である。装禎は同校を中心とする美術の會の所産として、歌集は水野君、文集は鷺見君がやつてゐる。(十一月号「地方人の出版活動」(十一月号))

◆「野村先生、本を讀んだ。本當にうれしくなつた。綴方もだが、生活を教えてくれた。僕は自然の信じ方がたりなかつた」(岐阜 水野義文)「この夏は岐阜の綴方聯盟で集まらうじやないか。今井響次郎と一しょに行く」(野村) (二一四)

◆岐阜に綴方聯盟が生れたので、その第一回協議會に出席するため六月二十日に岐阜へ行くことになつてゐます。そして、今日岐阜市明德小學校で、綴方教育に對する講演をすることになつてゐます。その機會に岐阜師範の江崎主事の依頼によつて、同校の訓導諸君と共に美濃町小學校に於て修身教育の話をする約束になつてゐます。これは六月十九日です。(二一六)

「生活學校」の讀者が十餘名も一校の職員の中にある美濃小である。

野村芳兵衛の主張する生活教育の考え方とその具体的な教室実践の数々は、少しずつ美濃小の教師の間に浸透していったことであろう。そして、「綴方生活」の同人として、生活綴方の創成と発展の柱として全国的に活躍してきた野村の理解と支援、指導を得て、水野、鷺見たちが綴方岐阜人連盟の結成へ向けて、一層奮い立ったことは想像に難くない。

#### (五) 學校文集「あかめがし」

美濃小が、學校文集「あかめがし」第一号を發刊したのは昭和十三年三月であつた。菊判、五十六ページの活版印刷、あかめがしの若芽をデザインしたカラーの表紙、ところどころに使われている版画のカットなど、當時としてはなかなかしゃれた感じの文集である。

編輯代表人は水野義文(第六号まで)、表紙は鷺見臣一郎(第二号まで)。毎年度一号ずつ發刊し、昭和十五年三月、第六号を出したところで休刊となつた。中央の教育雑誌の主宰者、編集関係者などともつながりを持っていた水野が、各方面へ送って批評を乞うたのであろうか、「あかめがし」は、「生活學校」・「綴方生活」・「工程・綴方學校」などの全国誌や「岐阜県教育」誌などの「文集紹介」欄によく取り上げられ、県内はもとより全国的に名を知られた學校文集であつた。

前掲の「生活学校」十一月号（昭和10・11）の他の雑誌の場合を見ると、次のようである。

☆「工程・綴方学校 五月号」（昭和10・5）

あかめがし 第一号 岐阜縣美濃校 水野義文

何よりも木彫のカットの優秀なのに打たれた。どれも立派な出来だ。「ふぐ」「鶏頭」などそのまゝ純文學雑誌のカットなどにも使へさうだ。活版印刷。

☆「あかめ解」第二號について 峰地光重（手紙）

『あかめ解』の作品全部讀みました。どの作品もととてもすばらしいと思ひました。それよりも私は美濃町小學校の子供達の訓練が、どんなに伸びくとして行はれてゐるかを想像して嬉しいのでした。

☆「綴方生活（九―五）」（一二・五）

あかめ解 第三號 岐阜縣美濃町校文集 編輯代表水野義文君  
活版 七〇頁 三月発行

☆「岐阜縣教育」（一二・六）

あかめ解 第三號

武儀郡美濃小學校の學校文集、編輯は主として水野義文君の手になったもの。この文集を見て第一に感心するのは集められた子供の文がどれも皆粒よりのもので、實に澁刺と伸びてゐる

ことである。學校文集にありがちなお義理に書いたやうな文は一つもなくて、全部が全部青空の下に健やかに育まれてゐる。これは決して只一人の努力や熱で作り得るものでない。私は驚見、後藤、山田、清水諸氏の尊い協力をこの文集の背後に感じた。……（子供の詩五点とその評、略）……とにかく粒よりの文章がこれだけ頭を揃へてゐることは偉觀である。「推敲表」「假名遣の誤り易いもの」「指導者のために」「父兄のために」「文材暦」等と、文集の組織に就いても教へられる所が多い。恐らく文集としては最高峰のものといふべきであらう。（岐師附属小學校綴方研究部）

「綴方岐阜人」創刊号の編集に美濃小の同人たちが取りかかったときには、美濃小の同人たちは、すでに「あかめがし」第二号（昭和11・3）までの発刊を終えていたのである。

このように、自分たちが編集・発行する學校文集が、全国的な教育雑誌で紹介され、先達から好感をもって迎えられたいことは、水野、驚見たちにとって、これから取り組もうとする「綴方岐阜人」の編集・発刊に自信を持たせたことが考えられる。

#### 四 「綴方岐阜人」の内容

##### (一) 掲載された論考等の全体

「綴方岐阜人」創刊号に載せてある原稿募集規定によると

- 一、「綴方を中心とする」といふ言葉にとらはれず、  
廣く一般教育に関する新鮮な理論がほしい。
- 一、現代文化に對して、青年教師のもつ批判感想等
- 一、教育技術の具体的な報告、例、圖畫の科學的指導、  
童詩指導一時間、どの子供も澆刺としてゐて、  
しかも統制ある學級の經營法
- 一、讀物（傳説、童話、隨筆、詩歌、小説等）
- 一、兒童作品詩文共に一篇以上、同人は必ず發送のこと

紙數はなるべく四百字詰原稿用紙五、六枚迄、  
短い中に張りのあるものがほしい。

この規定に拠つて、昭和十一年の創刊から昭和十三年にかけて、年一回ずつ三号まで發刊された「岐阜人」に原稿を寄せた同人と、その題目の一覽は次のようである。

《表3》 「綴方岐阜人」執筆同人と題目

同人名欄の( )は、原稿依頼者

同人名	創刊号	第2号	第3号
野村芳兵衛	知と愛		
岸 武雄	真実に根ざす	綴方談義	綴方に於ける基礎練習
田中盛兒	私の学級生活日記に就て	子供の作業と成績物のことなど	
安池重寿	現実・生活・社会	現実性と浪漫性 微風のある風景（創作）	綴方教育に於て指導すべきもの
河合芳男	表現心理に就て	表現心理について（承前）	挿絵について
大野繁一	木曾川舟遊（俳句）	童謡管見	老母を亡くす
水野義文	生活の意欲と知性	人生科か表現科か 噴水地帯	綴方教師のゆくみち 噴水地帯
鷺見臣一郎	畫家に聴く	第1回岐阜人研究発表座談会記 ありとみつばち（児童劇脚本）	好人物々語
尾畑鐘政	綴方教育と私		
(相馬 直)	今井君と僕		
川口半平	虫熟み	綴方人自他いましめのことば	
後藤慶一郎	菓子と子等	国字国語の諸問題	国語国字の諸問題
今井鑑三	良太と金（童話）	ガラス（童話）	兎（童話）
花村 奨		箴言集。 辭。	冬のひと日
伊佐治光雄		作品への愛慕	
遠藤敏夫		悩み	
伊藤健吉		黒板の美術史	秋風記
丹羽康平		展覧会のこと	
三浦一雄		けいざい	
(野島忠太郎)			時局と綴方教育
山田公平			綴方帳則自己文集を希望 葉書文二つ
渡辺修三			「生活帳」に関連して
曾我勝司			国語教育雑感
	岐阜人屋根の下	同人・グループ住宅	同人・グループ住宅
	編集後記	編集後記	編集後記

この表で見ると、三号にわたって執筆しているのは、水野義文、鷺見臣一郎、大野繁一、安池重寿、今井鑑三、後藤慶一郎、岸武雄、河合芳男の八名、二つの号に載せているのが川口半平、田中盛児、花村燦、伊藤健吉の三名である。いずれも「岐阜人」最初からの同人で、表1のところでも説明したように、「岐阜人」創刊の頃は川口を除いて、水野、鷺見以下河合に至るまで二十歳代の青年教師たちであった。

## (二) 巻頭言

三号とも巻頭言がある。創刊号は、野村芳兵衛が書いている。岐阜人連盟の創設、「岐阜人」の発刊に支援を惜しまなかった同人として当然のことであろう。

### 知と愛

ロマンローランは「世の中に唯一つの勇氣がある。それはあるがまゝに人生を見て、而してこれを愛することだ」と言つた。この知ると言ふことゝ愛すると言ふことは深い關係を持つてゐる。本當に知るものは愛するであらうと、本當に愛するものは知らずに止まぬであらう。然し知り且つ愛することは、ロマンローランも言つてゐるやうにとても勇氣を要する仕事である。

吾々は吾々の日本を愛してゐる人を見ることは多いが、愛す

るが故に知ろうと努めてゐる人を見るのが少い。吾々は吾々の日本を知つてゐる人を見ることは多いが、知るが故に愛そうと努力する人を見ることは少い。

吾々の綴方教育は吾々の生活を知り且つ愛するところの子供を作るための教育的努力の一視野に他ならない。

しかし野村は、この「岐阜人」創刊号が出された昭和十一年九月の前の月末に、東京池袋の児童の村小学校の主事を辞め、千葉県市川市の日出学園主事となった。野村が主事として組織した児童の村生活教育研究会も解散し、その機関誌として野村が編集に当たった「生活学校」も幕を閉じた。野村は、この後「岐阜人」同人としての名前は残しているし、「岐阜人小片」にも、美濃小で開催される講習会の講演内容等についての連絡が掲載されたりしているが、創設三年目という新しい学園の経営に多忙であつたのであらう、「岐阜人」に掲載されたのは、この巻頭言だけであつた。

「岐阜人」第二号の巻頭言は、川口半平が書いている。

綴方人・自他いましめのことば

☆綴方に憑かれないやうにすること。

☆生活指導をはきちがへて、綴方の正体を曖昧朦朧なものにしないこと。

☆生活詩は何の爲に指導するか？ とつくりと考へてみることに。

☆ 本を読むより子供の文を読むこと。

☆ 文學は齧るものにあらざしること。

☆ 文學書など本棚にかざつておくよりも、賣つて借金を拂う方がかしこいこと。(但し全集物は安いから見合せること。)

☆ 自分だけ高く留つて、他の職員をワカラズ屋扱ひにして得意であるなど、最も古い型であることをしること。

☆ 生活開発一切充足チャカポコ、お題目だけではいつまでも綴方は進歩しないこと。

☆ 實踐から理論を生み出すやうにすること。

川口半平は昭和十年四月、岐阜師範附属小訓導から揖斐郡小島小学校長となって赴任し、学校経営に当たっていた。創刊号にも「……綴方も虫いろみになつてはいけないと思ふ。色づかうとあせると虫いろみになりやすい。よき綴方を考へる人は、何よりも先ずよき教育を考ふべきだ。そこから熟さない實だつたら、色がよささうでも、それは虫いろみだ。健康ないゝ綴方の實をみのらせようよ。」と、二百字ほどの小さな囲みの一文を書いた程度である。

短文ではあるが、そこに書かれている内容の一々については、綴方指導にかかわる広がりや深まりを内包したものとなっており、川口一流の飄々とした物言いの中に、読み手への鋭い問いかけを秘めている。

川口は「岐阜人」刊行の時期と重なって、「岐阜県教育」誌に、戦後出版された『作文教育変遷史』のもととなる「綴方教授史概説」(昭和13年1月号・10月号)を連載しており、「綴方生活」誌に、創作「明暗微笑図」(昭和11年2月号・12年6月号)の連載の外、児童劇脚本二編(12・2)、随想「文藝に對する感想」(11・3)、「女教師についての感想」(12・7)、論考「綴方の底面指導」(12・5)を載せている。これに對して「岐阜人」の方には、前記二編を寄せただけであるから、編集委員としては、水野義文が「微笑笑半平、原稿を送ってくれずに、微笑笑しておはすとは存せられませぬわい。」(「同人グループ住宅」第三号)と書いたような思いがあったかもしれない。しかし川口としては、「岐阜人」だけにとらわれない、自由さを求めていたのではないかと推測される。

誌名が「教育岐阜人」と改称された第三号には、巻頭論文と呼ぶのがふさわしい「時局と綴方教育」(野島忠太郎)が載った。野島は岐阜師範学校付属小学校主事で、同人ではない。

野村(創刊号)、川口(第二号)と巻頭言がくれば、前掲表1から見ても、また前歴から言っても第三号は横山晋、と考えるのが普通であろう。しかし、横山は書かなかった。創刊号の「岐阜人屋根の下」という同人紹介欄に「川口と並んで岐阜県下の綴方の双璧。郡の中心の校長におさまつて、一文字に口を結んでゐる。加納にゐる。」

た時分は短篇、随筆、コント、論説ちゃん／＼書いてたんだが、近來書かないとかで岐阜人へも稿を呉れなかつた。」と書かれているように、結局、第三号の編集担当となった安池重寿（岐阜・本荘小）は横山をあきらめ、野島に頼むことにしたと思われる。

野島は、「岐阜人」からの原稿依頼に違和感があったのか、巻頭論文は次のような書き出しで始まっている。

綴方教育に迄時局との關連を以て考へねばならぬことは、とりわけそれが自由澆刺の「岐阜人」からの課題であることを思ふ時、少し固まり過ぎたか乃至はジャーナリズムの末尾に附したのであるかと一應反問する様な氣も起きるが、併し考へて見ると此の課題にはもつと本質的なものを藏してゐる様である。

野島のこの言から推測すると、日中戦争が益々拡大していく「時局」にあつて、綴方岐阜人連盟に集い、「綴方岐阜人」に拠つて綴方を中心に教育への発言を行う同人たちが、この時局にふさわしくない教師集団という見方を一部にはされていたのではないか、という氣がしてくる。

野島は、冒頭の部分に続けて、所信を次のように述べている。

それが子供の生活の全面に左様である如く、綴方作品に於ても今度の事變を中心にした時局色といふものが如何に綴る事を通して子供の魂を新に目覺めさせてゐる事か。確かに彼等の綴

る意欲に於て、綴らんとして眺める事件、對象に就いて、綴る勞作に於て、新しいものを見出し、生き返つて來た様である。それは教師が口を醋くして何物かを凝視めさせ或は眞實に描かせんとし焦慮苦惱を重ね來しつゝあつたものを、至極簡単に無言の中に教へ得た様である。毎日數通づつ受取る戦地からの第一線勇士の手紙を見ても一つとして名文でないものはない。彼等勇士達は必しも小學校當時の秀才や名文家ではないのであるが。

此の事實は結局文は、他の凡ゆる文化工作が左様である如く、生を地盤として持つてゐることの證左である。一生懸命に作らんとして骨折つた時に必ずしも良い文が出來ずに、今至極安易に力の文を生み出してゐる。ロゴスは言語であると同時に事行であり、ことばは事の葉である。文の事も結局生の充實、生の凝視、生の把握に外ならないのである。

これを教室作業に見るがよい。今度の事變によつて子供は今迄知らなかつた生の緊張を感じてゐる。その生の緊張が力に充ち輝かしく映り、生に澆刺として表現されるのは當然である。教師の眼は今迄氣付かなかつた子供の思ひがけない作品にぶつかつて驚異を感じる。所謂綴方上手の影が薄くなつて思はぬ子供の魂の躍動が意外な所に見出される。その眞實の彈の前には



表現技巧といふ様なものが稀薄なものに見えたりする。これは教師としての貴い発見であると同時に子供に働きかけるべき重要なポイントである。

右は併乍ら子供の綴方生活に於ける貴い鑛脈の発見に過ぎない。採掘、精錬は自ら別問題である。第一に子供は自己に對して決して充分批判的であり得ない。従つて自己の作品の良さを自證し得ない。自己の作品の評価といふことは驚くべき事には二十才過ぎても左様十全ではないのである。此處に子供のよい文を生む生活の発見が、自覺的表現へ迄といふ指導を必要とする。生は充實してゐてもそれは要するに事であつて理ではない。理の世界への自證を把握させるといふことは指導の重点である。この時局に直面した生の充實といふことを批判的に把むことの重要さを得て後、表現法の醇化といふ様な事が問題となるのであるが、此處からは綴方の常の仕事である。

以上は綴方を伸ばすといふ側から見たのであるが、教育といふ仕事のより根源的なものがあることを忘れてはならない。人は表現する爲に眺め考へる事を思ふ時、時局認識と覺悟といふことが正しい綴方教育によつて完成されなくてはならぬといふ事である。それは時局が彼等に話しかけるもの、與へるもの、教へるものゝ姿を綴方作品は正直に見せて呉れることを基底と

する。綴方を通して彼等の見、彼等の心、彼等の氣迫といふものを導き、よき日本人への行軍を指揮する。結局心理活動は受納と表現と自證に盡きるから自らが自らを拒むといふはたらしきは見、考へ、練り表現する綴方に於て大部分が行はれるもの故、此處に皇國精神把握に於ける綴方教育の重大な自覺があるであらう。

この号の編輯後記で編集担当の安池は、「野島先生より三枚の原稿を戴いたことは全く嬉しかった。此の一文が時局の旋風の中に立つ綴方教育のよき示唆を與へる事を確認するものである。」と書いているが、この論考を読んだ同人たちはどんな思いだったのだろうか。「岐阜人」の同人たちが、「時局」ということばに代表される戦時体制の強化が進む中で、自分の綴方指導を、自分の教育觀を、自分の教育者としての行き方を、これからどうしていくのかを、一様に突き詰めて考えざるを得なかったのではないだろうか。

安池は、前掲編輯後記の文に続けて、「水野の『綴方教師のゆくみち』、安池の『綴方教育に於て指導すべきもの』は共に今後の綴方教育の進むべき道への疑問だと思ふ。思索に疑問し、實踐に疑問し、一步とも前進せんとする意氣こそ時局下の青年教師ではあるまいか。」と述べている。

### (三) 水野義文

岐阜人連盟結成、「岐阜人」発刊の中心となって活動を進めてきた水野義文も、昭和十三年、「岐阜人」第三号の時期にきて各方面にわたって悩みが多くなったのではないかと推測される。

「噴水地帯」欄は、「岐阜人」第二号から水野が執筆している教育随想であるが、第三号のものを一、二挙げてみたい。

一字をかきかけて居ても先生が止めといへばやめることは、その字が上手に出来ること以上に先生の言ふことを聞いたといふ、この時代にまことにふさわしいたゞへることであると、いはれるやうになった。

こんな小さなこと、教室の中で書方の練習中の一寸した出来事、この中にまで我が國の文化が一大轉換をはじめてゐることを見出すことが出来る。

私自身も「さあ姿勢を正して、さう、くびすじを伸ばして、先生の目を見てゐなさい。」と云ひ、それに遅れた子供を叱つたりしはじめた。そして「自由主義から統制主義へ」といふ風の中にすっかり巻き込まれてしまつてゐるのであるらしい。

だが「さあ姿勢を正して」とか「止め」とか同じ命令を出し乍らしかも子供たちが姿勢を正し、字をかくことを止め乍らも、そこにふたいろのものがあると考へるのである。

命令しなければ動かない子供にしてゐたり、權力によつて必然生ずる反逆精神を培つてゐたり、意欲性の缺如した自主的精神のとぼしい子供を作つてゐたりするならば、かゝる方への轉換は、私一人のみならず、無慮幾百萬の子供の不幸であり、躍進日本の前途のためにもかなしむべきことであるまいか。

#### (文化の轉換期と教室)

「兵隊さん、お元氣ですか。」で始まる出征兵士への慰問文を紹介した後に「之は勝政がかいたまゝである。この文を出してはいひにくいが、私は新聞や雑誌に見る大人のかいた様な文には賛成しかねる。」

#### (慰問の綴方)

戦時体制の大きなうねりの中にあつて、安池の言う「思索に疑問し、実践に疑問し」何とか物事の本質を見極めて行こうとする水野の思いを窺うことができる。

美濃小の学校文集「あかめがし」も、第四号(昭13・3)を「出征將士慰問號」と銘打たねばなくなっている。編集に当たる水野は、時代の流れであつた戦意高揚という側面からではなく、綴方の本質面を強調してこの意図で努力している。

▼「夕方、一間ばかり離れて大便する。寒いく、みんな生米をかむ、水をのんで腹をこしらへる。夜中の十二時過ぎの頃であらう。パン／＼とうち出した。……友軍の突撃の聲をきく、

嬉しかった。自分たちも早く一緒に突撃出来ることを神様に祈ります。早く来てくれ。」

これは第一線におみえになる兵隊さんから来た手紙の一部分です。私は之をよんで如何なる戦の記事より強く心をうたれました。矢張り文といふものは文才といふもので上手に作り上げるものではなく、まことの心をそのまゝ書きつけるものだということを今更のやうに教へられました。

(中略) たくさんよんだ皆さんの文の中にはまだく文とは「文才」で作り上げるものだといふ考へがぬけきらないものもありました。生活をきめてかゝった文や、生活から離れた文は上手さうに見えても何の価値もないものです。(編輯後記)

尋一の「ヘイタイゴツコ」あれだけの量を文脈の乱れもなく、たいしたきずもなく書き上げたことは嬉しい。然しそれだけにまとまりがよく一年生らしさの乏しいものとも言へる。

「シロイ イヌガキマス。」から「コイコイ シロコイ。」に讀本まで變つた。綴方こそより全身的な行動表現を取らねばならない。

尋二の「はつでん所」は、はつでん所の中を驚きの目を見はつて過ぎる所に心ひかれた。驚きの目を見る子、不思議がる子は、綴方がすきになる子であり、生活も伸びる子である。

尋三の「しもうちへ行った事」は力作、「長ぐつ」はうれしい作品、共に生活が豊かでいゝ、會話など生きくしてゐる。

尋四「お兄様の出征の日」は題材的興味があり、表現も周到であり乍ら、人を惹きつける力が少ない。之は文才をもち合わせたが、現實的な感受性にかけてゐるためである。この子が上手に書く努力をやめて、眞實を描かうとするならば將來があると思ふ

尋五の「頭をかつてもらつたこと」は取りたてゝ言ふ程の新しい取材でないが、何よりこの子の野性に心をひかれた。之は一應下品だとして顔をそむけられるかも知れない。だが子供の現實から遊離してつゝまじやかに書き上げる作品は、よし立派に見えたとしても稱揚すべきものではないと思ふ。「倉知へ」心理描写にすぐれたいゝ作品

尋六「一つの一錢玉」「遠足」共に優秀作、「遠足」の文などふいふいと腹の底からわき上るものをもつてゐる、次々と讀んで行けた。かうした文が學級全員に綴れる様には是非しむけたと思ふ。

高等科「出征された叔父さん」の確かな表現、「弟」の女らしい細密な描写技術など、とることが出来る。

以上主として技術的な點について批評をのべて來た。

(赤めかし第四號の文について)

この綴方評の最後に、「主として技術的な點について」と水野が付言していることについては、実は、「岐阜人」第三号の「綴方教師のゆくみち」の中で、若い同人岸武雄の主張に納得しながらなお綴方指導での技術的な面の指導重視の考え方に同調しきれない思いを述べていることもつながる。

水野は、「綴方教師のゆくみち」を次のように書き出している。

綴方とは一體何のために學ぶんだといふ事を僕等はとつくと考へて見た。その煎じつめたものが、學級の子供全員に最低限度必要量の表現技術をもたせることであり、今まで高らかに叫んで來た生活指導なんて、むしろ修身科といふものが受けもつものであり、綴方とは結局文字表現による文化交通の手段を授けるものである、といふことまで後退して、こゝにいても確かな立場を得て日々の教室實踐にうつゝて行つたのであつた。

この確かな立場、このギリギリのものをにぎりしめて心安らかなるべきであるのに僕は寂しいといふより、何か忍びないものを感じるのである。

このように述べて次に、「もと／＼僕等が修身でなく、國史でなく、体操でなく、綴方といふ畠に寄つた根本は何故だらうか。」と問題を投げかけ、野村芳兵衛主宰「児童の村生活教育研究会」の主張に

学びながら、教育、生活指導、綴方指導等について骨肉化してきた過程と意義をまとめ、その大切さを再確認している。そして、結びを次のように書いて終わっている。

然し、僕等はこの仕事を綴方一教科ではたし得ると考へたのは誤りであつたかも知れない。そして綴方を文化交通のための一手段教科にまで後退させることも當面の務めかも知れない。だがその根本精神からけつして逃避してはならないのである。水野の迷う心が、そのまま現れているような文章である。

#### (四) 岸 武雄

岸武雄は、師範卒業後本巣郡船木小で一年勤務、翌昭和八年、岐阜師範附屬小の訓導となつた。附屬小国語部には同じ揖斐郡出身の川口半平がおり、二人の關係は、直接には同一校二年であつたが、その後も、川口が卒するまで終生続いた。

最初、岸は読方を中心に実践研究を重ね、まず「所謂『文意把握』の實踐的研究」を「岐阜縣教育」(昭8・11月号)に発表した。これに對して内野三男(土岐・日吉小)が「岸君の所説を讀みて」と異見を発表、「岐阜縣教育」誌は三回にわたつて二人の論争を載せた。翌昭和九年、附屬小は加納から長良へ移転、十年は川口の校長転出(揖斐・小島小)の後を受けて綴方主任となり、「岐阜縣教育」に

「童詩実践記録」を二回にわたって載せている。またこの年度末には附属小主催の県下訓導国語協議会があり、これに合わせて、川口が附属小在職中にはぼまとめた綴方の系統案を整理し、『新綴方系統案』（大衆書房）として刊行している。

「岐阜人」同人となった時、岸はおそらく二十二、三歳。二十歳代同人の中でも、河合とともに最年少グループに位置していた。師範附属小にいたこともあったが、これだけの実践研究の成果を持って参加したのである。岐阜人連盟が自然解消していく昭和十四年頃までに、岸は精力的に実践研究を続けた。

「岐阜縣教育」には県下小学校の丁寧な「文集紹介」を三回にわたって（昭11）、「児童文章に観る生活意識」を二回（昭13）載せている。全国的に見ても、『形象理論と国語教育』（西原慶一編・啓文社刊）に「綴る動力としての感受性」を書き（昭13・1）、「教育研究」に「ことばの修練と綴方教育」（昭14・7）を、会員報告として書いている。

「岐阜人」第二号に岐阜人連盟の事業の一つ、第一回岐阜人研究発表座談会（昭和十一年十二月実施）の記録が載っているが、記録者の鷺見臣一郎は岸の発表について次のように書いている。

附属の岸は、校正刷を持って、今印刷中の全校文集について話す。全篇、百數十の作品に、獨りで良心的な評を書き下したと言ふから、それ丈で、一見弱さうな彼の偉大な精力に感心し

てしまふ。長いになると、一篇に對して、原稿用紙の一枚半も批評を書き、主として指導者相手の指導を書くと言ふから、益々だ。文例を挙げては、自分の評を読み、意見を吐く。確かなものだ。彼は綴方に對して、本質的な歩みを希求してゐる。人生科とか生活科とかの名に置き代へられても一向差支へない様な、廣いと言へば廣い、曖昧だと言へば極めて曖昧な存在としての綴方に嫌らない。彼はもつと、他の藝術教科群の様に、多分に技術的な方向を重視した綴方教育を叫んで止まない。生活々々と言ひ、生活々々と書いてゐて、その實何か生活から遊離してゐる様な綴方も相當多い今日、岸の主張は、傾聴に價する。

「岐阜人」発足の段階から、若い岸に、主張の基盤となる実践の確かさ、実践研究内容への期待等が同人なかまにあることが分かる。次に挙げるのは、岸が「岐阜人」第二号に載せた随想的なものであるが、第三号に載せた「綴方に於ける基礎練習」の論考に、安池も編輯後記のなかで「岸が近頃諸雑誌に書く原稿にしても、又本號の『綴方に於ける基礎練習』にしても実践から叩き出した思索を發表してゐる態度は全くいゝ。彼が去年中六年生の女兒を持ちながら、たくましい実践を持續してゆく精力には感心せざるを得ぬ。この一文から彼の実践のたくましさを読み出してほしい。」と賛辞をおくつ

ているのも、岸が、同人の期待通り、綴方教育の面で着実に歩み続けていることの現れであろう。そしてこの歩みは、川口が「岐阜人」の巻頭言に書いた方向を、確実に引き継いでいるものであることもまた確かなことであろう。

### 綴方談義

#### 一

僕はまあ曲りなりにも綴方をやつてゐるつもりでゐるのだが、時々妙に寂しくなる時がある。それは、綴方が余りにもつかみ所がなく、その正体が知れない事である。だから着實な研究をしようと思つても、遺憾ながら「研究の窓」が開かれてゐないし、又「研究の武器」も整備されてゐない。

雑誌を見ると綴方は何時でも論戦が華やかだ。「○○を斬る」とか「○○綴方への抗議」などと實に仰々しい題目がある。併し、内容を讀んで見ると失望する時が多い。即ち「感じ」とか「言葉の勢」とかが闘はされてゐるのであつて、本當の地味な研究から生れた結論ではないのである。そして、泡沫のやうな論が次から次へと登場する。

しかし、この華やかな論文のオンパレードの中で「綴方の科學」として、恒久的な存在となるものは果して幾篇あるであらうか。多くは時と共に生れ、又時と共に流れ去る研究ではな

らうか。だから「綴方人」といふ感じの中には、何だか石油罐をガング／＼くやうな響きがあるやうな氣がする。

綴方人の研究ほどの範圍の廣いものはあるまい。哲學、教育の思想方面から古典、小説の文學方面から、政治、經濟、科學の方面に到るまで皆關心を持つ。又どれと言つて不必要なものはなく、すべてが「教養」として要求される。

しかし、綴方人はこれ程多くの武器を藏しながらも、遺憾ながらそれ等が一点に働きかける集中性を失つてゐる。皆、ぐる／＼綴方の周圍を廻つてみるが、どれもその本質をつかみ得ない。「働く綴方」といふが、その「働く」方面の究明はむしろ修身の研究畠だ。「生活指導」といふが、眞の生活指導は一週二時間位の綴方科に於て出来るものではない。

綴方を「人生科」乃至「生活指導の科」だと考へてゐる人が多いかも知れない。併し僕は綴方をさう考へることはやゝもすれば綴方を自殺させることになるのではないかと思ふのである。何となれば、生活指導の本領は何といつても修身が一番便宜だからである。又物を觀察させることは何と言つても理科が一番都合がいゝからである。綴方はもつと自分自身の姿を見直すべきだ。自己を忘れて徒に思想的に廣々するには、空虚であり、やがては綴方の自殺である。

綴方を教師側から眺めて「生活指導」の教科だといふのはおかしい。むしろ僕は「生活診断」の教科だと思ふ。即ち實際の生活指導は他の方面に譲り、子供の生活の健康度、倫理性、藝術性を診断することに、教師としての主力をそぐべきだと思ふ。實際に於て、子供の綴方は生活指導の結果であり、又出發点である。だから教師はそれを「如何に導くか」と考へる以前に、「如何に文に盛られてゐるか」といふ技術方面を見るべきだと思ふ。

子供の綴方に家庭的な經濟生活の片鱗でもあると、これこそ新しき綴方だと狂喜する綴方人が往々にしてある。そして「働く」といふ概念的なものによつて綴方全体を塗りつぶしてしまふ。又「調べる綴方」盛なりし時代は、數字やグラフが綴方用紙の上に只わけもなく陳列された。併し、それが果して、子供の眞實のものかどうか、又文として如何に表現されているかどうか、といふ所謂「綴方としての技術」は殆んど顧みられなかつたのである。

僕は「綴方としての科學」「綴方としての技術」を待望する。併しそれは、フローベル曰くとか、菊地寛曰くとかのあまくだりのものでなく、眞正の兒童表現技術である。綴方人はその有

する多數の武器を動員して、この兒童表現といふ未開の土地に鍬を入れるべきであると思ふ。今の状態では綴方はすべての借物のヴェールで身を包んでゐる。自分自身の着物を持たない。

僕が以上のやうな事を痛感させられたのは、波多野完治氏の「文章、心理學」を讀んでからである。僕は氏の所説にいろいろ教へられる所が多かつたが、中でも興味を持ったのは、氏が志賀直哉氏のセンテンスの長さ、語法、語彙と谷崎潤一郎氏のそれと比較研究して、兩氏の性格まで究明してゐる点であつた。

僕はそこで、文章に對する科學的な研究方法と、文章から生活を診断する自信を得たのである。そして兒童表現の世界をふり返つて見る時、幾多の問題が山積してゐるのを見出した。たま／＼僕の學校の主事さんから、「今までの君達の研究はオピニオンに過ぎない。もつと實證的基礎に立たねば駄目だ」との忠言を受け、益々意を強くした。そして今、ぼつ／＼その方面に足を入れようとしてゐる。(後略)

岸の「岐阜人」時代の研鑽と実践と、そして豊富な兒童作品が、昭和十四年末から昭和十五年にかけて刊行された『實踐綴方教授細目』上・下(ミツビシヤ書店)となつて集大成されるのである。

今井は、前掲《表3》で見るように、「岐阜人」には三号とも童話を書き続けた。「良太と金」（創刊号）、「ガラス」（第二号）、「兎」（第三号）である。

今井がいつ頃から童話を書き始めたのか分からないが、鈴木三重吉の「赤い鳥」に今井の名前が出るのは、昭和六年七月号。「本号入選童話作者 益田・小坂小 今井鑑三殿」とある。昭和六年は、財政難から一年余り休刊していた「赤い鳥」が復刊されることになり、その一月から発行を始めた年である。復刊後の「赤い鳥」で三重吉は、新しい童話作家の発掘に努めようとし、作品の投稿を呼びかけていた。今井はそれに応募したことになる。今井は、岐阜師範の卒業が《表1》で見えるように昭和三年度であるから、二十二、三歳の若さであったことになる。

入選欄に名前が出たことでより発奮し、童話作品を書き続けたのであるう、今井の作品は「赤い鳥」に掲載されるようになる。

昭和六年	九月号	水およぎ
〃	十二月号	川島君
七年	三月号	大時計
八年	七月号	良太
〃	九月号	ひろつた銀貨
九年	八月号	虫歯

十年 十一月号 ねずみ

昭和十一年八月号に、鈴木三重吉逝去の知らせが掲載されて、「赤い鳥」は終焉を迎えたが、復刊「赤い鳥」の六年間に、若い今井が、評価の厳しい鈴木三重吉の選に入って、七篇もの童話を「赤い鳥」に載せたのである。今井は、自分の作品「水およぎ」が初めて「赤い鳥」に載った喜びを、「赤い鳥」（昭6・11月号）の通信欄に書いている。

昭和十一年の「岐阜人」創刊号から後、今井が「岐阜人」に載せた童話は、「赤い鳥」に載せた童話の引き続きの位置を占めていることになる。その一つを見てみよう。

#### 兎（童話）

稲を刈りとった田んぼで陣奪りごっこをしてゐた文吉は、もう夕方近くなつたのでみんなと別れて家へ帰りました。

入口から

「お母ちゃん。」と大聲で呼びながらとびこみましたが、お母さんの返辭はありません。洗濯物でも取りこんでゐるのかな、と土間を通りぬけて裏へ来て見ても居りません。風呂場かも知れんと、そこも覗きましたが居りません。あゝ、川で洗ひ物かと思ひながら畑をつきぬけて小川の方へ行きかけてふと物置の横の兎小屋に目をつけると、



「アレツ。」と立止まつてしまひました。兎のマル公の姿が見えませんが。兎小屋——といつても、リング箱をなほして、正面に金網を張り、一部分を仕切つて開き戸にしたのですから、大分離れてゐても、白い綿のかたまりみたいにマルくふとつたマル公の姿は、はつきり見える筈です。文吉はお母さんを見つつけ出して何かねだることなど忘れてかけ寄りました。

——やつぱりからつぽです。それでも文吉はしやがんで金網に顔をくつゝけて中を覗きこみました。覗きこんだつてこんなせまい箱ですもの、隠れやうなぞあらう筈がありません。

からつぽの箱の中は、ワラがぐちやぐちに踏みにぢられ、ところ／＼にくつゝいた白い毛がフワ／＼動いてゐるばかりです。

箱の後も見ました。いや、ゴト／＼動かしても見ました——どこにもゐません。

文吉はぼんやり立ち上りました。

逃げた——。だつて、この戸があかるなんておかしいや。

すると、文吉の眼に、チャリと、マル公が何か怪しいけどものに首すぢをくはへられてさらはれて行くところが映りました。

狐！ いや、イタチ——。うゝん、犬？

どいつがやつたか知らないが、きつとさらはれたんだ。さうに間違ひない。あのおとなしいマル公がキャンともクウンとも言はずに、

首すぢからポタ／＼血を落しながらさらはれて行つたんだ、と思ふと、文吉は、どこかそのへんに血がこぼれてゐないかと、目を光らして地びたを見廻しました。そして犬みたいに顔を低く下げてそこから中を探し始めました。物置の裏、ドブ板の上、桑の根っこ。でも、どこにも血のあとがありませんし、白い毛一すぢだつて落ちてゐません。それでもずっと畑の中までふみこんで探し廻りました。

文吉はマル公に子を産ませて、どん／＼殖やしてやらうと考へてゐたのです。大きな圍をして十匹も二十匹も飼つてやらう。そして弟も仲間に入れてやつて二人で草を刈つてきて、腹一ぱい食はせて、どれもこれもマル公みたいに肥らせてやるんだ、と思つてゐたのに、こんなことになつてしまつて、しやくでたまりません。

狐でも狸でも出る、ブンなぐつてやるからと、いつの間にか太い棒を握つて、茶やぶの下をつゝいたりしてゐました。

と、その時、いつ歸つたのかお母さんが家の中から、

「文吉や、ちよつとオ。」と呼んでゐるのです。文吉はしぶ／＼と顔を上げてそちらを見ました。

「そんなところで、お前何をしとるの。ちよつとおいで。」と、お母さんはなにか手に下げた物を見せるやうにして呼んでゐます。

こんな大變なことをまだ知らないんだ、と思ふと、うらめしいやうな、又なにかにすがりつきたいやうな氣がしてジクリと涙が湧き

ました。

「お母ちゃん。兎居らんぜ。」と、しぼり出すやうに言つて文吉はグヅグ〜と入つて行きました。

お母さんが手に下げてゐたのはキツネ色の温かさうな衿巻でした。「これ、ちよつと巻いてみい。」とお母さんは差出しました。文吉はそれを受取らうともせず、

「おれの、兎、居らんも。」と、も一度泣き聲で言ひました。すると

「うん、兎か。お前の兎はなア、さつき、あきんどさに賣つてやつたよ。そいつでこの衿巻買つて來たとこさ。」と、お母さんは、ニコ〜しながら言ふのです……。

「ナニ、賣つてやつたア——。なんぜ、なんぜ賣つてやつたの……」  
「それでもお前、いつかは賣らにやならんぢやないか。さつき、あきんどさが、よう肥えとると言つて一圓で買つて行つたわ。一圓やぞヨ。高う賣れたものさ。」

「一圓がなんや。俺ア錢なんてほしうない。」

「錢は要らないけど、それ、お前のマントは竹にゆづゝてやつたで、お前は寒うなつても何も着るもんがないんぢやで、此の衿巻買つてやつたのさ。さ、一ぺん巻いてみい。」と、お母さんは又、それを差出しました。けれども文吉は受けとらうともせず、顔をふせてグ

ツグツと泣き出してゐました。

「まあ、何んて子や此の子は。」と、お母さんはそれでも笑ひながら、文吉の肩のところへひろげてかけてやりました。すると文吉は、それにさはりもせず、わざと肩を揺つてふり落し、

「衿巻なんて何んや。俺アいらん——。お母ちゃんのバカバカ、バカ。」と、とう〜大聲に泣き出し、いきなりお母さんに倒れかゝつてバタ〜とお乳のへんをたゝきながら、グン〜押ししていきました。お母さんも、

「まあ、まあ、此の子は——。堪忍、かんにん。」と言ひながら押されるまゝになつてゐました。

×

×

お父さんは山から、お兄さんは工場から、弟の竹夫は遊びから歸つて來て、夕飯が始まりました。

みんなが笑ひながらおいしさうに食べるのに、文吉だけは一言も物を言はずにボソ〜と食べてゐました。

夕飯がすむと、みんなはチロ〜燃える、ゐろりのそばへ寄りました。お母さんが笑ひながらさつきの話を始めて、タンスの上からあの衿巻を持つて來ました。お父さんは

「そりや一圓とはよう賣れた。」と言ひながら衿巻を手にひっかけて見ながら、

「こりや又、いゝやつぢや。」と感心しました。兄さんまでが

「一圓ならいゝよ。こないだ吉田君のところではたつた七十錢で賣つたつて。」などゝ、工場友達の兎のことを言つてゐます。そして、どれ、と衿巻を取つて自分の首に巻きつけ、

「あゝ、これやぬくとい。兎よりよつぽどいゝや。どうだ、よう似合ふだろう。」とニヤ／＼笑ひながら横目で文吉を見ました。文吉は、あわてゝ横を向きました。

「何をさう慍つてゐるのだ。いやなら竹にやつてしまへよ。そら、――

竹。」と兄さんはポイと衿巻を弟に投げてやりました。弟は

「うれしいなア。ほんとうかい。」とお母さんの顔を見上げてゐます。

文吉はノツソリと立上つて部屋へ入つて行きました。

ドツと後でみんなが笑つてゐます。

みんなバカだ。人のものをだまつて賣るなんてお母ちゃんだつて誰だつて悪いや。子を殖やした方がどれだけいゝか知れない。衿巻なんて誰が巻いてやるもんか。衿巻まいて來る奴なんて、組の者では青ぶくれの太一だけだ。

文吉は暗やみの中に坐りました。

――マル公が、鬼みたいな男のかごに入れられて背負はれて行きます。前足でガリ／＼かごを引っかきます。うまくぬけ出してとん

で來ないかなあと、文吉は思ひます。そして、あしたの朝、いつものやうに口をモグ／＼させ、前足で金網をガリ／＼やつてゐたら……「文吉や。寒いにこつちでおあたりや――。兎はまた買つてやるに。」とおかあさんが呼んでゐます。

――次の朝、眼がさめた時、文吉はほんたうに子兎を一匹買つて貰はうと思ひました。そしてとび起きて臺所にゐるお母さんの所へとんで行きました。お母さんは「よし、よし。」と約束をしてくれました。「きつと。今日だよ。」と文吉は念をおしました。

――學校から歸ると文吉は、金槌と釘と板切れを持つて裏へ來ました。そして兎の箱を横にして、破れてゐるところに板切れをあてがつてコン／＼と打ち付けました。狐なんかにとられぬやうに、戸の掛け金もなほさうと思ひました。

すると、いつの間にか弟がそばへ來てゐました。そして「兄ちゃん、これ、ほんとにくれるのかい。」と言ひます。見るとあの衿巻を首にまいてゐます。

「うん、お前にやる。」と、文吉は言ひすて又、コン／＼とはじめました。をはり。

今井の童話について、同人の安池は「今井の童話は本誌の持つ誇りだ。こんなよい童話を自由に載せられる同人誌は少ないだらうと思ふ。」と言ひ、水野は「天下に光る童話作家の今井」と述べてい

る。また、前掲の岸の場合と同じく、岐阜人研究発表座談会で発表した今井について、鷺見は「岐阜人」(第二号)に、次のように書いている。

次には飛驒の入口を扼してガツチリ構えてゐる童話作家、萩原の今井が立つ、きれいに書かれた文藝ノートを擴げて、腹から物を言ふ。

新童話私観と題した一場の名講演だと言つて何等はずかしからぬ立派な形態を持ったかれの私観であつた。彼には、赤い鳥以来の數々の童話作品があり、全く良心的で子供の眞實に迫らうとする熱烈な意志が、どの作品にもはつきり見られる。それ丈に彼の話は、迫力を持ち、みんなをして謹聽せしめた。

結局、童話文學は今迄、大人の片手間仕事の意味で創作されてゐた。眞實子供への心の糧を意圖するよりも、例へばおしやぶりをやつてあやす様なそんな氣持の創作態度が大部分でなかつたか！これではいけない。吾々は、子供の眞實を突く、子供の生活を本當に底からゆり動かす作品を物しなきやあならなと力説した。坪田譲治、槇本楠郎等と並んで今井鑑三の存在は確實だ。幸に健闘すべしと、誰も彼も期待をかけるに十分だつた。

同人たちの、今井への期待を表している一文である。

## 五 「岐阜人小片」

### (一)

「岐阜人」創刊号の「綴方岐阜人聯盟の足あと」の項に「昭和十一年四月十五日『岐阜人小片』第一号発行、同七月二十日第二号発行」と書かれていることは先に触れた。この「岐阜人小片」(以下「小片」と表記)は、同人の手によって、藁半紙に謄写版印刷された、「岐阜人」の同人向けの印刷物である。

その実物は、同人個人宛に、折々に送られてきたものであり、七十余りの間に散逸したと思われたが、筆者は幸い、同人であった戸谷重太郎氏が保管しておられた九回分の「小片」に接することができた。それらは、次のページ《表4》のようである。

謄写版刷りのため、印刷不鮮明な部分もあり、昭和十四年に入ってから「小片」については、号数、発行日等が不明で、内容に書かれている日時の明確な事項から類推して発行月を特定してある。

岐阜人連盟規約の中に、会誌(「綴方岐阜人」)の発行は「本会の事業」の一つとして挙げられているが、「小片」については何も触れられていない。考えられることは、「小片」の発行が、連盟の目的である「この組織を通じて会員相互の文化を交通し友情を高め綴方を中心とする教育一般の前進を意図する」ためには、必要な事業

《表4》

## 「岐阜人小片」発行の状況

《 》内は発行の記録のみ。実物は未見。

年	月	事 項	岐阜人小片（月・日）	枚数（B4）	担当
昭和11	4	綴方岐阜人連盟発会式	《第1号（4・15）》		《美濃小》
	5				
	6				
	7		《第2号（7・20）》		《美濃小》
	8				
	9	「綴方岐阜人」第1号発刊			
	10				
	11		第4号（11・24）	3	美濃小
	12				
昭和12	1				
	2				
	3				
	4				
	5	「綴方岐阜人」第2号発刊			
	6		号数不明（6・20）		美濃小
	7		第2巻－4号（7・18）	3	郡上八幡小
	8		第2巻－5号（8・20）	6（表紙）	萩原小
	9				
	10		第2巻－6号（10・31）	4	萩原小
	11				
	12		第2巻－7号（12・26）	6	付属・長良小
昭和13	1				
	2				
	3				
	4				
	5				
	6				
	7	「教育岐阜人」第3号発刊	岐阜人小片（号数、発行日、担当不明）		
	8				
	9				
	10				
	11				
	12				
昭和14	1		岐阜人小片（号数、発行日、担当不明）		
	2				
	3				
	4				
	5		岐阜人小片（号数、発行日、担当不明）		
	6				

であることが判明した結果の措置であったということである。

「小片」第一号が発行されたのは、四月の連盟発会式の四日後である。発会式への同人の参加は十五名。同人総数の半分である。二か月後の六月、野村芳兵衛を迎えての綴方講演会では、一般の聴講者が三百五十名ほどあったというが、同人参加者は二十名で同人の三分の一は出席していない。

どちらの場合も、同人が顔を合わせれば、教育のこと、綴方指導のことはもちろん、これからの連盟の運営、九月に予定される「綴方岐阜人」の発刊についてのことなど、意見交流が行われ、事務局から事務的な連絡等もなされたことであろう。

《表2》で見たように、同人は県下全域に広がり、交通事情もままならず、経費もかさむ。学校や個人の事情で、万難を排して集まるとという訳にいかないこともある。参加できなかった同人に、なんらかの連絡方法を講じ、状況を知らせ、必要な事項については全員に確認してもらうということ、で、「小片」を出すということになったと思われる。最初しばらくは、事務局の美濃小がその担当をしたのではないかと推測される。

「小片」第四号は「岐阜人」創刊号が出て二か月ほど経ってのものである。その内容は、先ず連絡・報告に類するもの。

#### ◇岐阜人プラン

#### 一、新教育大講習會

来年七、八月中三日間 會費約一円

講師 峯地光重、野村芳兵衛

#### 二、年刊兒童文集（岐阜縣版）

編集委員ヲ擧ゲテヨイモノヲ作り兒童ニモ、モタセル

#### 三、岐阜人小片

小片ヲ月刊ニシ、ハガキデ新鮮ナ問題ノ提示、実践報告、ゴシップノ發表機關トスル

#### 四、第二回研究發表會

来年二月ニハ同人ハ大イニ研究シタコロヲ全縣下ニ發表シヨウデナイカ岐阜日々ガ後援スルトイツテキル

#### 五、會員

會員倍加シタイ其内ヨリ秀デタモノ同人トスル

#### 六、兒童劇輯

二月發行 厚生閣交渉中

#### ◇第一回岐阜人研究發表會

時 昭和十一年十二月六日午前十時

所 岐阜市明德小學校

午前十時には正確に開会、二十分前に来て会場準備がしていた  
だきたい。研究發表の時間は一人約十分、題目は事務所宛ハガ

キで本月末日までに提出のこと。同人の他會員及其の候補者を多數つれて来ること。同人にて當日欠席の者は一金三十銭会へ寄附すること

人間は一人居たら心臓に皺がよる。古くなる。寄ってお互が摩擦し合つて若くなるんだ。若い者はいゝ理論がほしい。将来がほしい。それをにぎる時にいつも若々しくなる。岐阜人が集つて痛快にしゃべり合つたら心臓ははつて来るにちがいない。自分の教え子の作品をもつて集れ。

◇岐阜人第二号 〆切 十一末日

原稿募集 一月一日 發行

細目は岐阜人参照のこと

次の内容としては、事務局へ寄せられた「岐阜人」創刊号についての同人の短信。

#### ◇反響の一齣

綴方岐阜人創刊号落手、非常に嬉しくて堪らなかつた。創刊号としての編輯上々。稍分量少きの憾あるも次第劣りにやせてゆくよりも、これから次第に太つて行く方が景氣もいゝからそれで結構、編輯委員の御苦勞を拝謝、ばくも出来るだけ會員を獲得する、校内の評判も上々、研究発表会計画してがつちりやうたい。各委員諸氏によりしくお伝へを願ふ。(今井鑑三)

蛾への御批評ありがたう、一同に代つて御礼をのべておく。同人が会合する機会をつくつてほしい。本学期中にいゝ文集をこしらへたいと思つてゐる。皆さんにこれはいゝ、といつてほめてもらへる位のもので作りたいと思ふ。(河合芳男)

を初め、伊藤、丹羽、花村、田中、川口、座馬のものが載せてある。もう一つの内容は、「岐阜人」に載せるような、評論、随想の類。この号では、水野義文の「児童劇について」を載せ、現今学校の学芸会で多く行われる児童劇の現状を批判し、「劇をすることは、子供の生活の發展に寄與する力の多少が最も問題にされねばならない。故に、脚本の精神が子供の心理に即してゐるかと思慮すると共に劇を行ふことが学級社會を内容的に向上せしめるかといふ点である」と述べて、自分が行つた劇指導の一端を紹介している。

#### (二)

「岐阜人」第二号が発刊された昭和十二年五月、「小片」も二年目に入り、編集担当、内容に變化が見られるようになった。

先ず「小片」の編集担当がこれまでの美濃小から、郡上・八幡小、次いで益田・萩原小、そして師範付属小(長良小)と、持ち回りのなつたことである。いずれも、複数の同人が勤務する学校である。八幡小については、「岐阜人」第二号が発刊された段階では、田中

盛児ひとりであったが、七月発行の「小片」では、新入同人として片桐哲郎、渡辺修二、渡辺初一の三名が紹介されており、また、田中がこの「小片」で

郡上に「奥美濃国語人」が生まれた。同人二十七名。名前は国語人となっているが、それほど固苦しいものでない。年六回の會合と機関誌の発行（年三回）。岐阜人の同人諸君、聲援をたのむ。

と述べているように、新しい氣運の盛り上がりが見られることが、一つのきっかけとなったのであろう。

「小片」二・四号は、先ず「岐阜人・第三号原稿募集」の連絡から始まる。「内容 自由、分量 大体四百字詰九枚、ノ切 八月の講習まで」とあって、送り先が「本莊校 安池重寿」とある。「小片」のみならず本誌「岐阜人」の編集も、担当が美濃小から持ち回りの方向を取り始めたことがうかがわれる。

「小片」担当引き継ぎの思いもあるのか、水野の「第三号への希望」が載せてある。

1. あまり理屈は多くない方がいゝ。短いいゝ理論がほしい。二つか三つ。

2. 次に岸も言つてゐる。小さい角度からの実践が知りたい。どんな些細な技術でも、古いたとへだが千金の價がある。

3. 何と言つても同人の随筆がほしい。かういふ方面からふかみのあるものをかいてくれ。

そして、「4. 僕の原稿に對する考えをのべる。」として、今井：童話、伊藤：隨筆、花村：詩、伊佐治：実践断面、岸：ある一時間の記録、渡部（高）：書道のこと、田中（文）：総合教育……と同人一人一人について挙げている。

「小片」において同人のハガキによる交流欄の占める割合は大きい。常連は「実」のある内容を寄せている。

△河合芳男▽岐阜人を昨日受取つた。オソ生レだけあつて仲々ガッチリしてゐてうれしい。池兄の「現実性と浪漫性」、岸兄の談義は素晴らしい。池兄のはもっとヒューマニズムへの関心についても言及してほしいと思つた。談義はデミな、堅実な研究で大変教へられた。今井兄のガラス、昨日子供に読んでやつたら、子供が自分の心をクスグられる様な貌をしてゐた。……

△岸 武雄▽岐阜人拝受。とてもよく出来てゐた。素晴らしい御努力こと、思ひつ、讀んだ。慾を言へばもつと小さい角度からの実践報告がほしかったなあ。……

△今井鑑三▽……「良太と金」「ガラス」の二篇について坪田さんに批評をして頂いた。この二篇、何れとも清新で雨後に見る青葉の思ひゝ吾国にこれほど生々した、これほど眞眞



実であるものはあるまい。→これを二十篇でも集めたら、現代の日本では一線を越えたもの→と言ふ言葉で、とてもうれしく、且つ初めて僕の作品に対する真味のある批評を有難く思つた。尤も二篇が児童生活のスケッチであり、従つて作品の序章である点は坪田さんも指摘して下さい。坪田さんは軽薄な人でないから坪田の言葉はうれしい。

### (三)

次に「小片」二一五号（萩原小担当）から、内容に変化が見られるようになることである。枚数もこれまでより多くなる。この中で、今井は、「〃岐阜人小片〃活用の方途・その他」と題し、かなりのスペースをとって、次のような提案をしている。

この〃小片〃は、本誌「岐阜人」の年三回発行の間隙をつないで、普段着のまゝの物言ひ振りでお互ひ教育者としての生き方を考へ、語り合ふと共に、それがぼくら聯盟の實質上の活動の源泉になるものでありたいと思ふ。僅か年三回発行の本誌「岐阜人」に、いくら虹の様な気焔を吐いても、（それはたしかに観念的には良いものを与へてくれるのだが）それはそれで済んでしまふ。従つて同人相率ゐるて向上を期するといふことには比較的「岐阜人」は消極的である。

と言つて〃小片〃に雑文（失礼！）ばかりを盛つてみたところでタバコ吸ふ間の一読で片付けられてしまふ性質のものではないか。とにかくこのまゝでは存在の價值が稀薄だ。

×

そこで、このガリ版をぼくらの実践研究室として活用したいと思ふ。

手取早い一案を提出する。それは目新しいことでも何でもないが、綴方作品の毎月合評會を紙上に持つことである。綴方の研究は先ず以て作品にぶつかるところから始まると思ふ。作品を遊離した観念論争に終始することよりも、作品の研究に依つて実践理論を立てることが実践家として何より正當な行き方だ、と誰も彼も言ふけれども、実行となるとどうも活潑でない。ぼくらが共同で作品を検討し、ぼくらの綴方に対する態度を相互的に正しくして行くことが（一体綴方人には独善的な個人主義的色彩が強すぎると言ふのは言ひすぎだらうか）ぼくら個人にとつても、又一般的にも大いに効果があることだと思ふ。

#### 方法は

1. その月の作品提出校（若くは提出者）を予め決めておいて、低・中・高学年と三篇位の文・詩を提供してもらふ
2. 提出者は同人の数だけプリントして〃小片〃編輯係へ送り、

そこから各同人へ発送する。

3. 同人は作品に対する批評・感想を編輯係へ送る

(この批評は、総合的・印象的総評などよりも、角度を与へての批評研究の方がいい。子供同志の合評などもいい、だらう。又、その時に端し書に通信など書いてよこせばいい)

4. この合評の記事と、次回研究作品(これは「小片」発行日までに次の学校から送ってもらつておく)とで「小片」を編輯する。

この方法なら継続も可能だし、何よりもその作品と合評記事とは單にぼくらの研究になるばかりでなく、日々の教壇上にも利用できる。校内の誰彼にも利用して貰へる。

かうした仕事が進められて行けば、この縣にこの聯盟が生まれた意義も明確にもなり、全県下の拡充にも役立つこと、思ふ。何にしる、県下一流の綴方人の集りだから。

×

このことは、ぼくらの「岐阜人」が先ず綴方研究中心に経営されて行くことを前提として言つてゐる。

誌名こそ「綴方・岐阜人」と、とらはれる必要はなく、むしろ「教育・岐阜人」とした方が拡充性、包容性があつて、ぼくも結構だと思ふが、内容は教育分野に互つてむしろ焦点を不明

瞭にするよりも、矢張り先ず綴方を先頭とし、或は中心としておし進めて行くことが意義があり、ハッキリしてゐると思ふのだ。と同時に、折角踏み出した「綴方・岐阜人」として、提示し得る業績(綴方に対する)を持ちたいと思ふのだ。

ここには、今井鑑三が、「綴方岐阜人」に集う青年教師の同人たちと、具体的・実践的な綴方指導について、語り合い、討論し合い、磨き合つて、岐阜県下の綴方教育を一層高めて行きたい、そのための「岐阜人」であり「小片」であるべきだ、という純粹でひたむきな思いが、同人を初心に返らせるような強い響きをもって語られてゐる。

今井の思いは、萩原小同僚の同人戸谷重太郎と共に編集した「小片」の体裁・内容にも現れている。B4藁半紙を半截袋綴じにできるようにして、最初の一ページはちよつとした冊子様の表紙となっている。内容をみると、冒頭は「綴方とは何ぞや」という小川隆太郎寄稿の小論が、一段組みで六ページ(筆者注・終わり二ページは二段組で別の記事と一緒に載せてある。そこでは、綴方理論を振り回すよりもまず実践。そして子供にすぐれた作品をどしどし生産させること、それが教育としての進歩だと述べ、さらに綴方は子供の書いた文学であるとの考えに立つて、子供たちによい作品を書かせることができるのは、教師の持つ文学力の如何によるのだから、教師はもつ

と文学作品を読み、作家を研究せよと主張している。

前掲「〃岐阜人小片〃活用の方途」に流れる今井の考え方から見ると、この「小片」の冒頭に、小川の寄稿文を載せた意味が分かってくる。それは、今井が編輯後記の中で、

綴方人にとつて最も、勉強は、自分が文を書いてみることに  
と思ふ。書物理論をやつてクダクダ言つてゐるよりも、この方  
がきつと効果があると思ふ。筆不精な瞑想的な綴方人は先ず自  
己を清算すること。そしてドシ／＼「岐阜人」の原稿を書き、

ドシ／＼通信をよこすこと。

と書いたことにも繋がる面がある。

「小片」の内容はその外に、その夏の「新生活講習会」とのかかわりで、野村芳兵衛から水野義文に宛てた三通の手紙を紹介した「講習會が産まれるまで——野村さんからのたより——」、同人からの便り（水野、岸、柘植、大野、曾我、田中）、三浦の旅の詩と文、である。

以上内容を概観したように、萩原小の今井・戸谷が編集した「小片」二一五は、綴方及びその指導の研究へ向かおうとする、生真面目でひたむきな印象を読み手に与える冊子であった。

なお、この号の編集後記を、今井は次のように結んでいる。

召集令状飛ぶ。

一年生曰く「先生は戦争に行かないの」

村人曰く「先生たちは■■■■地帯ですなア」

最後の一行の中の二字が墨で塗りつぶされている。

この「小片」が発行されたのは、中国北京郊外盧溝橋で日中両軍が衝突し、日中戦争が始まった十日後のことである。村人が言った言葉をありのままに書いて、同人たちへ知らせることが、いろいろな点で差し障りが生ずるのではないかと慮った結果であろうが、綴方において、「本当のことを、見た通り、聞いた通り、ありのままに書く」指導ができなくなるような、そういう戦時下の時代が始まろうとしていた証し、と見ることができる。

#### (四)

今井鑑三は、前号の「〃岐阜人小片〃活用の方途」で、同人による綴方作品の合評を「小片」の記事としていくことを提案したが、提案しただけで終わりとはしなかった。

次号も引き続き萩原小担当とし、共同研究のための提出作品も、萩原小のもの綴方二編（「くつを買ってもらったこと」、「低鉄棒」）詩二編（「雨降り」「早い朝」）を同人宛に送っている。これらの作品に対しての評を載せたのが、十月末に発行された「小片」二一六号である。

作品評を寄せたのは、河合芳男・山内孫六郎・岸武雄・伊佐治光雄・山田公平（詩）・水野義文（作品評でなく自分の作文観）である。その幾つかを見てみたい。

・「くつを買ってもらったこと」

▽「くつを買ってもらったこと」「低鉄棒」共に佳作だと思ひます。しかし大へん傾向が違つてゐますね。特に前者は全く今井鑑三の童話を読んでゐる感じです。特に弟とくつのみせびらかし合ひをやつてゐる所など全く子供性だと思ひました。最近色々の雑誌等のよい綴方、よい詩として発表されてゐるもの、中にはとても陰郁なものがあり、大人みたいな生の生活面を描いて居り、児童本来の明朗なる生活面が窺はれないのが淋しい感じでしたが、この綴方などとても嬉しい作品でした。しかし、この綴方の中心となつてゐる靴を買つて貰ふ嬉しさについて尚一度表現を通して考へてみねばならないのではないでせうか。次に小さい問題かも知れませんが、文態の問題、方言の問題もあると思ひます。方言の地の文への使用は次の「低鉄棒」には一層甚しい様ですが、表現意欲を縮ませない範囲で標準語へと向はねばならないのぢやないでせうか。（河合芳男）

▽ 題をみて、書いてるなと思つた。何かうれしかった事でも書いてみよと云ふと、こんな題がざらに出る。さうして文を読んでみ

るとうれしくも何もない。然し萩原校のはいゝ。児童の環境を知ればうなづけるし、表現もいゝ。作者に聞いてみたいところ

1. 「君は『あまりのうれしさに勉強もできなかった』と言つてゐるが、おばさんが『たびは何文や、くつを買つてこんならんが』と聞かれたとき、弟は頭をよこにしてぎきちやうになにか書いてゐたし、君も勉強してゐたらしいが本当のその時の様子はどんなだつたね。 2. 「古いくつ、どうしてしまつたの、まだはけなかつたですか」（山内孫六郎）

▽ 實に愛すべき作だと思ひます。ゴム靴一足買つてもらつて、あれ程無邪気に喜ぶところは涙ぐましい氣持さへ抱かれます。特に「ねごとの練習をするところ」は子供らしくて微笑ましく、又「夜中に眼をさましてすつかり靴を忘れてゐた所」「らくだの印で威張る所」などよくリアルに書いてゐると思ひます。一番しまひの三行、即ち「兄さんは地下たびの破れたのをはいてゐるので、そのことを思ふとあまりうれしくない」といふところはどうもまだ観念的で、なくもがなどの感がします。子供らしい喜びをリアルに書いたゞけでいゝのぢやないかと思ふのです。けだし傑作と思ひます。ぼくの組の子ども喜んで読みました。（岸武雄）

・「低鉄棒」

▽ これもよく書けてゐる。ユーモラスな中に、作者の真剣な思ひ

が貫いてゐて、力のこもった作だと思ひます。文のセンテンスが非常に短い。これは瞬間的な心理の動きをあらはすには都合がよく、この文でも終の方の「始めて上れた」個所など、その様子、心理が澁刺と書けてゐます。しかし、それだけに一種の「粘り」とか「ニュアンス」といふやうな点に欠けて来ると思ひます。センテンスの長さで作者の性格——一寸考ふべき問題があるやうです。「そこら一面まぶしい位の露」「すゞしい風が櫻の間を」等の自然描写はこの文の一すじの感情と融合しない氣がしますが、どうでせう。作者の性格には好感が持てます。(岸武雄)

▽ 一、明るい感じがする。屈托しない文だ。かなりのびくと書いてゐるのは、指導者の苦心を證明するものであらうが、尋六の作品としては、今少しキリッとした所がほしい様に思はれる。二、田舎の子供らしい純朴なところと、この子の性格であるむしろ剽軽者らしい所が、この文章から想像される。殊に「おれの尻は百貫ある」と書きなぐるところなどは、作者の性格からのみ得られる、子供の生活の具体的な姿であるだらう。三、純情なものが基礎となつてこの文の展開をさせてゐることを見落すことは出来ないが、末尾のしまりが、だれて来てゐる様に思はれるのはひが目だらうか。それはそれとして一貫して自分を見失はない様になん／＼筆を運ぶ所は敬服の外はない。(伊佐治光雄)

・詩「雨降り」「早い朝」

▽ すべて頭が先に進むと眞実性とかけ離れ、情におぼれても生活は不健康となる。高一男作「雨降り」「早い朝」の詩二篇、詩を作為しようとの心が頭を出してはゐないか、「働くものがへつたので早く止めばいい、な」「僕も出来るだけ手傳ふのだ」は北方ばりの実感の伴はない空虚な言葉だ。「早い朝」一見佳い詩らしくて足りないところがある。目に見、耳に入るものを書きつけても詩にはならない。それを統一する感動がなければならぬ。「西の溝も冷たさうに底石が見えて流れてゐる」も頭で書いた言葉だ。「カタリ、すみきつた音だ」大げさすぎる表現ではないか。

(山田公平)

▽ 「雨降り」——僕はどうもかういふ詩に対してあまり心が動かない。作者の心持に偽りはなからう。しかし「悲惨だ／＼」といふ意識があまりにも作者の頭に濃厚で、物の眞実を見る眼を幾分曇らせて行くのではあるまいか。祖父の背の濡れてゐるのにはあれさを感じるのはいとしても、役場から帰つて来た父までも一色に塗るといふのはどう考へても観念的すぎる。環境はみじめでも、結構そこに明るく生きて行くのが子供の成長の姿であり、又、教育としてもそれが望ましいと思ふ。「早い朝」——鋭く研ぎすまされた作者の感覚には敬服する。が、詩として最も必要な

心のうねりが余りにも繊細で低い。貫く生活的うねりがほしい。

しかし感覚修練の習作といふ意味ではよいサンプルだと思う。僕は「雨降り」と「早い朝」の中間をとりたい。「経済」とか「感覚」にとらはれない澆刺たる子供の詩がほしい。(岸武雄)

「小片」には、同人から寄せられた作品評が、作品別に順不同で並べただけであるが、綴方作品をどういう観点から、どのようにとらえて具体的な指導を重ねていくのか、読み手にとっては極めて実践的な意味を持つものとなっている。作品を提供した萩原小の同人は、

こんな多忙な時だし、第一、作品があんなつまらないものだし、とてもたくさん批評はいたゞけまいと、淋しい予想を以て作品を送り出しましたが、人数は少なくとも、この通り親味のある、うがつた御批評をいたゞいて有りがたく思つてゐます。御批評は皆適切なもので、僕等の問題としている点にも、成程とかなづける示唆をいたゞいて喜んで居ります。こゝに御礼を申し上げます。

と書いて終わっている。本当は萩原小同人の戸谷や今井が、「うがつた批評」「批評は皆適切なもの」「成程とかなづける示唆」の具体的な中身を書いていてくれると、そこから次への発展が期待されることになるであらう。水野良文が

……こまかな批評はうちの学校で合評會をやつてそれを速記してお送りしますが……

と書き、この号の終わりの消息欄に河合芳男が

……作品研究會を先般長良校で岸、安池、丹羽、山田君等出席してやりましたよ。岸君の尋六女兒の作品を中心としてゝすが、とても意義がありました。

と書いているように、同人としては、本当は綴方作品研究も同人が顔を合わせて、話し合うことを望んでいるのだがという思いのあることが分かる。

次の「小片」二七号は、その年も押し詰まった十二月二十六日に発行された。担当は長良校・岸武雄。B4半折袋綴じ十一ページ、うち九ページが、研究文として提供された生活日記A、生活日記B二つの作品についての同人からの批評が、上下二段に書かれている。批評文を寄せた同人は、水野義文、藤田正三、戸谷重太郎、山田公平、曾我勝司、鷺見臣一郎の六名。その幾つかを見てみると、次のようである。

#### ● 水野義文君

先ず子供の声をきいてくれ。(筆者注・項目の幾つかを省略)

(イ)「天皇陛下と言つてもへいきで菓子をもくく食べてゐる。何といふ人だらう」といふところはハツとした。

(ロ)「兵隊さんはどんくみえる、その人達の顔を見ると何だかさみしさうだ……、といふとにろはだれでも兵隊さんなら元氣であるとキメて『元氣だった』と書くが、本当がかいてあつてよいと思ひます。

(ニ)「かに、御飯をやると、はさんで食べる、とは細かに書いてあります」「先生、ほんとですか」「鯉の尾をくってしまふに」「大きいやつだらうか」「十糶ぐらゐさ」「一寸やかましくなる」

(ト)「電線にゐる赤とんぼの羽が光つて美しいつて、高いで見えません」「うまさうに一寸書いたのです」「日に光つてゐたのかもしれない」

以上は僕の学級の子供の批評を出来るだけそのまゝかいたのだ。いろく子供へ話してやるべき問題をはらんでゐる。私も三回しつかり読んで、こんなに生活と紙一枚のギャップも持たない様な表現をつくづくけなしく思つた。

#### ● 戸谷重太郎君

生活日記二作、両方とも別々の意味で個性的にしつかりと書けてゐると思ひます。僕の子供も丁度同じやうな日記を書かせてゐるのですが、高二男あたりの理窟っぽい寒々とした子供には、B作のたくまな童性やA作にみるやはらかな感受性など全くいゝ参考になりました。かうした日記で困ることは、こちらがなまけ

ると報告的な羅列に終わることではないかと思ひますが、その点指導の大変親切に行きとゞいてゐることを感じます。最初の日記などはあれだけです。一つの綴方(綴方時間に書かせる普通の生活文)になつてゐると思はれるのですが、實際僕の組でも一つの條を展開した長文が日記の中に表はれて来るのですが、かうしたものが續いて行けば、特設の綴方時間の経営も再考していかなければならぬと思つてゐます。尚、取材の方向も大部分が家庭生活に傾いてくるので、学校生活といふものゝ関心も子供の心にもつと高めるやうにしてやらなければ(結局これはこちらの教育、機構の問題ですが、子供の生活場としての学校の位置です)と考へてゐます。とにかく繼續させるといふことが平凡だけれどもねうちのあるところで、こいつは教師の根氣と正比例してきます。

#### ● 山田公平君

##### 文例 A

自由によどみなく書けてゐるのは見上げたものです。素直な性格そのものが、表現の性格そのものとなつてゐます。それが反つて一面から見れば、冗漫な敘述となつて、全体をだらしなくさせてゐます。「よし、水をかけてやろうと思つた」「又思ひかへして」「池のお掃除をすまして今度は」「すると」「あつ、われたか」「こ

れはいかん」等相当無駄な言葉を使つてゐるため表現の緊密性を失はせて、素直な性格を少しふまじめ（悪い意味でなく）にさへ見せてゐます。殊に日記文として見れば、この点特に注意が必要だらうと思ひます。これと共に「あんばよう」「叱りなさつたけど」の方言矯正も無理な要求でないと思ひます。又、指導者も言つてゐられるやうに、優等児らしい観念的な言葉遣いも所々に伺はれます。「長い間待つてゐると向ふから」「とても勇ましく」「どんくみえた」「何だかさみしさうだった」「体に重い道具を」等、女子特有な通有性を見せてゐます。具体的な描写が行はれなければならぬでせう。傍観的になる作者の態度をもつと積極的に転回させることが、以上の表現上の缺陷を補ふことになります。勿論環境が町方であるとすれば困難とは思ひますが。図解も表現の補助となるものですから、こゝではその必要もなからうと思ひます。

#### 文例B

之も素直な表現態度はわかりますが、具体的な描写がほしいと思ひます。一般的な日記でなく歯日記とでもして今少し細かい観察をさせて記述させたならば、面白いものが出来たかも知れません。

#### ● 驚見臣 一郎君

どうもおおそくなつてまことにすまん。以下感じたこと、考へた

こと、希望すること、ごちやくに申します。

#### 作品Aについて

一讀誠に自由に、素直に、すらくと書かれてゐていゝ。いさゝかのわざとらしさもなく、又高学年の女子にあり勝ちな氣障な虚飾といったやうなものもなく、いゝ日記だなと共鳴しました。（指導者より）としてこの子供のアウトラインが紹介されてゐるのを讀んで、再讀してみる。そしてこの子供について色々想像してみた。性質温厚、これと言つた缺点もない——と指導者も認めてゐるとほりやはり第一に静かな兒かなと思ふ。そして、それはおそらく現代のインテリがさうである様に、生活態度が曖昧で、例えば学級内に問題が起つても、早速旗色を鮮明にしてその問題を處理すべく骨折る——と言つたやうな生活の積極性が一向なさうな子供ではないか。勿論先生にとつてはまことに始末マヤらしい子供で、ほつて置いても心配もないし、言ひつけた仕事はきちんとするし、言葉も丁寧でいゝし、仕草もお上品だし、（非常に素直ないゝ子）であるに違いない。が、一等物足りなく感ずることは、この子供の連帶感情の貧困である。お池の掃除をしても、きれいになった喜びを家の人に分つて一緒に喜んでいたゞくのもなく「私がどうしてもせねばならないと思つたからです」と冷静な意志の独白をしてゐる。又職員室の当番をやつても、ぴか



くになつて教室へ来てもすつとして嬉しかった——のが如何にもつましいお上品さは感じられるが、ちつとも当番のお友達への喜びの連りが無い。尤も火曜日の日記や木曜日のそれを讀んでみると、比較的観念的な部面（あんな人がゐるから日本も云々）と言つた様なことは表はれてゐるが、身近な、子供達の社会に於ける生々とした同感情が比較的弱い子供ではないか？と言つたやうなことをこの日記を通して考へてみた。

三讀。こんな日記を毎日つけさせてゐる指導者の一方ならぬ苦心と、そして喜びを思ふ。毎朝、昨日の生活を讀んでしみぐとした氣持になるだらう君の生き甲斐を思ふ。そして子供達も、どうか先生に眞實が語れるやうに、それには先生への信頼と自己の生活に對する嚴肅な、容赦のない——甘さのない批判を要する。ほめられたさに嘘を言ひ、叱られたくないばかりに嘘を書くことは一應本能的な自己防衛として容れてやれる先生であつたなら、子供もその後には「私は叱られると思つて嘘を書きました。つまらなかつた」と言へる子供になるんだと思ふ。

B作品についても書くべきだがもう時間がおそい。自分の生理についてかなり精密に書いた作品として非常に珍しく讀んだ。殊に齒の伸びるのを見守つてゐる喜びが短いことばに溢れてゐて讀んでゐてもうれしい。

何か君の行き方——綴方を多分に技術学点的觀點に立つて指導する——のに対して、又あり来りの生活指導的なことばかり言つた様な氣がしてならない。僕の書いたことに對して、君の考へがきかれるならば嬉しいと思ふ。

前号の「小片」と比べ、寄せられた作品評が詳しく、丁寧になっていることが分かる。これに對して岸武雄はその末尾に、「指導者より」として、

皆さんからいろいろの角度より批評していたゞき、ほんたうに教へられる所が多かつた。しかし、やはり現實に作者に接してゐる僕としては、又いろいろちがつた見方もあるわけだ。だから、御批評にお答へしたいのであるが、さうすると正直なところ原紙をもう五、六枚切らねばならぬ。甚だずるいい方であるが、またいつか面會した時に譲つて此度は勘弁してもらはうと思ふ。

と書いている。ここでも、先述したように、ただ作品評を書いて載せるだけでは、どうしても話が一方的になって、綴方指導に對する指導者の考え、実践的な指導の過程や作品の評価など、具體的なところでの交流、そして実践の深まりがないことへのいらだたしい思ひが感じられる。

なお、「小片」前号で「十二月・或は一月の研究文提出者、常盤

校の河合君いかゞです」とあり、この号の連絡欄にも、「研究文批評、河合芳男君へ。ハガキ又は封書、なるべく早くお出し下さい」とある。しかし、戸谷氏の『『小片』綴り』には、今井が提案し、萩原校（今井・戸谷）担当、長良校（岸）担当と続いた綴方作品共同研究特集の「小片」は、この号以後はないし、最終の発行号かと思われる「小片」（昭和十四年五月ころ）に、

共同研究作品☆ 批評を書いてくれたのがとても少なかったの  
で、印刷はやめた。小片にのせるニュースもどんく送るとい  
と思つた。

次回小片担当 美濃校 批評其他〆切 六月二十日

とあることから推測すると、「小片」における作品研究の試みは、昭和十二年度後半で終わつたと見るのが妥当であるように思われる。

## 五、綴方岐阜人連盟の終焉

綴方岐阜人連盟に集つた同人たちの組織としての活動が、いつ頃その終焉の時を迎えたのか詳らかではない。しかし、そのことを推測する手掛かりとして、「岐阜人」第三号発刊（昭和十三年七月）以後、昭和十四年になって発行された「小片」によって見てみたい。

《表4》に挙げたように、「小片」は昭和十四年になって少なく

とも二回発行されている。発行月を、内容から推測して一応一月、五月としたが、発行担当学校（同人）は記されていないので不明のままである。このうち、一月に出された「小片」は四枚あるが、それぞれに「岐阜人小片」と標題が付してあり、複数の同人から出されたものと思われる。

一月、五月の「小片」から、岐阜人連盟の組織活動にかかわる主な事項を見てみたい。

### （一）一月の「小片」

建設昭和十四年ヲ迎へ自由澆刺タル吾々教育岐阜人ハ教育ノ進歩的ナ面ニ向ツテ言ヒマクリ書キナグラネバナラヌ、コノ時コノ國ニ教育大改造、教育革新ノ時ガ來テキルノダ。「岐阜人」第四号ハコレヲ集メテ全県下實踐者ノ前ニ送ラウトスル。

#### ☆ 教育岐阜人總會

一、時 昭和十四年一月七日 午後三時

一、所 男子師範附属小學校

尚、当日ハ附属小學校ニ國語講習アリ

今回ノ總會ハ重要會議ナレバ全員出席ノコト

☆ 昭和十四年岐阜人プラン

一、教育岐阜人發行 第四号 二月十一日

1. 教育革新・綴方特輯

2. 原稿ノ切 一月九日 美濃小学校宛

二、縣下年刊兒童文集發行（第一卷）

1. 作品は自分の指導したもの、自分がよいと思ったもの

（他校の作品にても可）

2. 原稿ノ切 二月十五日 男師附屬 岸宛

三、大講習會

1. 時 七、八月（二日間）

2. 講師 波多野完治、其他

四、岐阜人例会

1. 時 県教育會前日

2. 所 柳ヶ瀬 明治製菓



長期建設三年を迎へて教育戦線にも其の使命の重大観がひしくと迫るものがある。吾が同人諸氏の活躍こそ待たるゝ時ではないか。思惟よし、實踐よし、がつちり組んで實のある仕事をしたい。

▲ 一月七日 長良校講堂に国語の講習會があつた。流石知識

欲に溢れる同人諸氏の顔が多い。講習會後会場のストーブを囲んでの會合に集まつて來た同人二十名程 横山晋先生にも來て戴いて會について二三の相談をした 此の会の伸展のため互に努力する熱意が同人にみなぎつて うれしく感じさせる。來會せられなかつた同

人に報告方々 以下議決事項 掲載

一、會計の件 會計部独立（岐阜市明德校に置く） 年二円の

會費を納付

二、總會 縣教育會第一日の終了後直ちに柳ヶ瀬明治キヤ

ンデーへ集合

三、第四号雜誌編輯の件 長良校 岸、田中、河合 三氏にて

担当

四、第三号整理の件 前号 會費未納の同人諸氏は同封振替に

て至急二円 納入して下さい 印刷屋への支払に困つてゐるから 至急 至急

▲ 岐阜人の原稿募集 岸

1. 二枚半か、五枚か、七枚半か、十枚かにしてほしい——題目、氏名に三四行取つて書くこと

2. 論説、實踐報告、隨筆、童話、脚本、詩歌なんでもいゝ、軽い氣持でしみぐ書いてほしい

3. 『紙上座談會』に同人全部必ず葉書にて解答すること

座談題目「今 何を考へ何に悩んでゐるか」

主として教育實踐（広い意味の教育）上の問題を取り上げてほしい。女の悩みなど遠慮してほしい

4. 締切——出来るだけ早く

## (二) 五月の「小片」

### ☆ 教育岐阜人聯盟規約改正

①・新入同人は入会金として金五拾銭を納入すること

②・脱會せんとするものは、未納會費を全納すること

なお、この「小片」に、美濃小校舎が四月十九日夜火災で焼けたことが載せてある。

以上のように見てくると、岐阜人連盟の組織的活動が、少なくとも昭和十四年五月までは続いていたことが分かり、また、同人たちも、昭和十四年度の諸事業に向かって、今年もまた、という思いをもっていたことも分かる。恐らく、六月に計画されていた岐阜柳ヶ瀬の明治キャンデーストアでの「岐阜人」同人の総会もひらかれたことであろう。それであるのに、結果的には、「綴方岐阜人聯盟」は組織的活動を止め、「綴方岐阜人」の発刊、「岐阜人小片」の発行もなくなった訳である。

「岐阜人」同人たちの、組織活動継続への願いがあるのに、どうしてこのような、はつきりしない終焉を迎えなければならなかったのか、その原因と思われるものについて考えてみたい。

なんと言ってもまず第一は、昭和十四、五年頃の、いわゆる太平洋戦争前夜の日本の国全体の戦争態勢への強化が、あらゆる分野に

わたって一層強固に進められて行ったことが挙げられる。

歴史年表で昭和十四、十五年の主な事項を拾ってみると、政治・経済面では、兵役法改正で短期現役廃止。ノモンハン事件で日本軍、ソ連・外蒙軍の総攻撃を受け大打撃を蒙る。国民徴用令公布。第二次世界大戦勃発。日独伊三国同盟条約締結。などがあり、社会・文化面では、国民精神総動員強化方策決定。大学の軍事教練が必修科目となる。興亜奉公日始まる。パーマメント禁止。砂糖・マッチ切符制となる。左翼的出版物に対する弾圧強化。映画・演劇の統制強化。ダンスホール閉鎖。国民服令公布。などがある。

教育の面で、特に、綴方教育にかかわって注目すべきことに、昭和十五年十二月の「北方教育」「生活学校」の同人検挙がある。児童一人一人の生活を大事にし、自分の生活、身のまわりの生活を見詰めさせ、自分の生き方を考えさせる、ものの見方、考え方、感じ方を育てて行こう、そのために的確に表現できる力を付けていくこととする綴方指導や教育は、全体主義、統制主義、上意下達主義、そして軍国主義の社会には危険な存在であった。

岐阜人連盟が、岐阜県教育会答申にある「教育者ハ時局ニ対スル認識ヲ深メ……」に努めない輩たちの集団、という偏狭的な見方をする雰囲気、「北方教育」「生活学校」の同人検挙の報に対比して出てくることは十分考えられるし、また、昭和五年の岐阜における

新興綴方講習会事件のなかまの流れを汲む者たち、という見方もこ  
うした際には醸成され易いものをもっている。例えば、岐阜県の教  
育の動向をかなり記事として取り上げている「岐阜県教育」誌も、  
「綴方岐阜人連盟」の誕生、その活動、同人誌「綴方岐阜人」の発  
行など、一言も触れることはなかった。

推測でしかないが、そうした周囲の雰囲気「岐阜人」同人たち  
の意気込みを、消極的なものにしていくことになったのではないか、  
と考えられる。

次に考えられるのが、学校現場の多忙さが一層加わり、同人組織  
の活動への自発的な参加、あるいはそのことのために時間を割くこ  
とが出来にくくなったのではないか、ということである。

「岐阜人」が発刊されていた頃でも、同人の集まりは岐阜県教育  
会総会の時の合間を利用したのだし、「小片」にあった昭和十四年  
一月七日の長良小で行われた岐阜人総会も、小学校読本完成記念  
「日本精神と国語教育」講習会のあとで行われたものである。

昭和十六年四月からの国民学校発足の前後はその対応、教育課程  
整備、講習会に追われたことであろう。また「岐阜人」同人たちも  
年齢を加え、有能で確かな中堅教員として、校務分掌上でも重要さ  
と多忙さが増して来て、ゆとりの時間がなかなか生み出せなくなっ  
たことであろう。

また、人事異動によって、一校の中で、あるいは簡単に行き来で  
きる近隣の学校の、気心の知れ合った同人と、別れ別れになるとい  
うこともあったと考えられる。新しい環境の中で、新しい同人を増  
やしていくということは、忙しさの加わる中では億劫な思いになる  
こともある。

こうした状況の中では、「岐阜人」「小片」への原稿を書くこと、  
「小片」の原紙を切ること、会合へ参加することも、だんだん遠の  
いていくのではないかと考えられる。

更にまた、原因の一つとして考えられる大きな問題として、財政、  
特に「岐阜人」発刊の経費等のことがある。

すでに第二号の編輯後記で水野が、「軍需インフレ、物價騰貴、  
印刷材料も幾割増で、萩野印刷所主・村山徳一氏の大勉強を以てし  
ても頁數増加等の關係もあり、少々の値上げを餘儀なくされた……」  
と書かざるをえなかったし、第三号刊行後の「小片」で、恐らく安  
池であろうが、「会費の件」として、次のように書いている。

同人雑誌の倒れる原因は種々あるが、最大の原因は経済の點  
だ。本雑誌の印刷代が五十円見当である故 同人数が二十五六  
名として 一人当り二円の会費が徴収したい。……印刷屋も紙  
代騰貴で困つて居る様だから成るべく早く送金してほしい。

前掲昭和十四年の「小片」でも、会費が問題にされているが、安

池が「同人数 二十五六名」と書き、最後の発行になった「小片」でも、「脱会する者は未納会費を全納する」と規約改正するなど、財政上の苦しさの問題が大きかったことがわかる。

岐阜県教育会編の「岐阜県教育」誌が休刊になったのは昭和十五年十月、小木曾旭晃編集の「教育新聞」が廃刊になったのも昭和十五年五月である。「綴方岐阜人」も、同人の懸命な努力があったとしても、これらと同じ終焉を迎えたであろうと思われる。

いずれにしても、本稿では、岐阜県において、昭和十年代前半に「綴方岐阜人」に集った小学校の二十歳代の若い青年教師たちが、戦時体制が次第に厳しさを増す困難な状況の中で、組織をつくり、精一杯、綴方教育に取り組んだ事実があったということの一端ではあるが、解明の手掛かりを得ることができたのではないかと思っている。

◇「綴方岐阜人」

創刊號 綴方岐阜人聯盟編 昭和十一年九月  
第二號 “ 昭和十二年五月

◇「教育岐阜人」第三號 教育岐阜人聯盟編 昭和十三年七月

◇「岐阜人小片」(謄写版印刷) 九篇 昭和一一～一四年

◇「赤い鳥」 赤い鳥社 昭和六年一月～一一年八月

◇「岐阜縣教育」岐阜縣教育會編 昭和八年一月～一五年一〇月

◇「生活學校」 兒童の村生活教育研究會編 一九三五年一月～昭和一一年八月

◇「綴方生活」 小砂丘忠義編 文園社 昭和九年一月～一二年一〇月

◇「作文教育變遷史」 川口半平著 岐阜県国語教育研究会 昭和三十三年一〇月

◇「日本の歴史」別卷5年表・地図 中央公論社 昭和四二年九月

◇「會員名簿」 岐阜大学教育学部同窓会 廣濟堂 平成一一年一二月